

新 年 號

目 次

聖訓摘要	聖訓摘要	開目鈔講話(第二十六講)	和歌	誓願を起せ	私利と公利	本佛實在の論證(一)	漢詩	保健の要點	記事
.....
本	小	本	西	上	河	成	池	田	龍
多	林	宮	部	田	合	島	龍	龍	龍
日	日	滿	長	明	北	明	北	明	北
生	郎	常	露	事	卯	明	北	明	北

○本部團報
○團費誌料寄附金及維持費領收

○福島支部報
○福島高商讚仰同窓會報

第 四 十 四 年 一 月 號

1414

統

一

法財
人團

統
一
團
發
行

財團 統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正統ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許サザル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正統ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團 畧則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正統ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- ◎賛助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ賛助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方ヲ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

聖

諫臣國に在れば則ち其國正しく、争子家に在れば則ち其家直し。國家の安危は政道の直否に在り、佛法の邪正は經文の明鏡に依る。夫れ此國は神國なり、神は非禮を稟けたまはず、天神七代、地神五代の神神、其外諸天善神等は一乘（法華經）擁護の神明なり矣、然して法華經を以て食と爲し、正直を以て力と爲す。法華經に云く、諸佛救世者大神通に住して、衆生を悦ばしめんが爲の故に無量の神力を現すと。一乘（法華經）棄捨の國に於ては、豈に善神怒を成さざらんや。仁王經に云く、一切の聖人去る時は七難必ず起ると矣。……

敢て日蓮が私曲に非ず、只偏に大忠を懷く故に身の爲に之を申さず、神の爲、君の爲、國の爲、一切衆生の爲に言上せしむる所なり。

語

事變第二の新春を迎ふるに際し

異體同心妙法廣布の大願に勇精せむことを期す

南無妙法蓮華經

昭和十四己卯年元旦

本多大僧正創建

財團
法人

統一團

幹部同人

聖訓摘要

本多日生

本門戒體鈔

普賢經の戒師は千里の外にも千里の内にも、五徳有るも五徳無きも、等覺已下の生身の四依の菩薩等を以て全く傳受戒師に用ゆべからず。受戒は必ず三師一證一件なり、已上五人なり。三師とは一は生身の和尚は靈山淨土の釋迦牟尼如來なり。響の音に應ずるが如く、清水に月の移るが如く法華經の戒を自誓受持する時必ず來り給ふなり。然れば則ち生身の釋迦牟尼如來を捨て、更に等覺の元品未斷の四依等を用ひんか、若し圓教の四依有らば傳戒の爲に之を請す可し、傳受戒の爲には之を用ゆべからず。(縮刷遺文錄) (一八八二)

普賢經の戒は正像末の三時に亘つて生身の釋迦如來を以て戒師と爲す、故に等覺已下の聖凡の師を用ひざるなり。小乘の劣應身、通教の勝應身、別教の臺上の盧遮那、爾前の圓教の虚空爲座の毗盧遮那佛、猶ほ以て之を用ひず、何かに況んや其の已下の菩薩聲聞凡夫等の師をや。但し法華迹門の

四教開會の釋迦如來之れを用つて和尚と爲すなり。二は金色世界の文殊師利菩薩之を請じて阿闍梨と爲す、四味三教並びに爾前の國教の文殊には非らず、此は法華蓮門の文殊なり。三は都史多天宮の彌勒慈尊之を請じて教授と爲す、小乘未斷惑の彌勒乃至通別圓等の彌勒には非らず、亦無著菩薩の阿輪舍國に來下して授けん所の大乗師の彌勒にも非らず、此は蓮門方便品を授る所の彌勒なり、已上三師なり。一證とは十方の諸佛なり、此れは則ち小乗の七證に異なるなり。一件とは同伴なり、同伴とは同じく受戒の者なり。法華の序品に列なる所の二乘菩薩二界八番の衆なり。(一八八三上)

蓮門の戒は爾前大小の諸戒には勝ると雖も、而も本門の戒には及ばざるなり。十重禁とは一には不殺生戒、二には不偷盜戒、三には不邪淫戒、四には不妄語戒、五には不酤酒戒、六には不說四衆過罪戒、七には不自讚毀他戒、八には不慳貪戒、九には不瞋恚戒、十には不謗三寶戒なり。(一八八四上)

この「本門戒體鈔」は御遺文中大切な御書でありまして、その御趣意のある所を十分に會得する必要があらうと存じます。それは日蓮聖人の宗旨としてお示しになつた三大秘法、その中には本門戒壇といふ一つがあります、之れを形の壇といふ方に力を入れますれば、或る時を以つてさういふ建物を拵へて、其處に於て修行をする譯でありますけれども、壇の作法といふやうな事よりは、最も大事な點は、その内容を爲す所の本門戒といふものが大切なのであります。その本門戒といふ事を明かにするには、「三大秘法鈔」を見ただけでは判らない、即ち「本門戒體鈔」といふこの本門の戒體といふものを明かにし

て、之れを實行し、この戒を授くる場所を 天皇の詔を得て建設する時が、本門戒壇の建立といふこととなるのであります。それ故に一國の本門戒壇としては、天皇御歸依の日を待つのでありますけれども、或る者が相集つて一つの團體が信仰を捧げる所のお寺であるとか、會堂であるとかいふものは、それはやはりその人達の本門戒壇であります。又一軒の家に佛壇があつて、其處に修行を致しますれば、其處はその家に於ける本門戒壇であります。併ながらその場所ばかりが大事であるといふ考に囚はれてしまつては、その趣意が判らなくなる譯である。それで三大秘法の大事な點は、その「戒體」にあると私は考へます、それ故にその戒體の事を明かになさつたこの御書は、十分に會得して置かなければ、宗旨の大事が判らぬことに相成ると思ふのである。本門の本尊といふ事は無論大事であるけれども、それと相俟つて本門戒壇といふことが判らなければならぬ。所がこれが初らぬやうになつて來たのは、その本門戒に背く人が多いものであるから、之れを本當に明かにしては困る事が多いといふので、之れを混亂に導いたものであると私は考へます、それは甚だ宜しくない事である。

大體「戒」といふ事は宗教には最も大事な事でありまして、戒は「止惡作善」と申して、惡を止めて善を作せよといふことが戒であります、宗教には必らずこの惡を止めて善を作せよといふことがある、それを除つてしまへば宗教の大事な効果といふものが無くなつてしまふのである。それ故にその「戒」といふものを明かにして置かなければならぬが、それが餘りに窮屈なことになつては又實行が出来ないし、

時代に會はないと實行が出来ない、然ればとて戒といふものを不必要なりといふことになれば、その宗教は力を失つてしまふものである。所が佛教は「戒」といふ事に就て最も整頓したる宗教であつたにも拘らず、それを擲きそれを應用する上に非常な暗愚な事が起つて居る、一つは非常に頑迷にして、戒といふものは一寸一分も動かすことは出来ぬといふことばかり考へてしまつて、さうして暑い國の方に於て行はれた事でも、それを寒い國に持つて行つてその通り行らうとする、洵にその運用を失つたのである。釋尊が戒を打立てられた御趣意はさういふものではなかつた、即ち「開遮」といふ事をお示しになつて、その精神を聞いて新たに設定すべき事柄と、又時を異にし所を異にして不必要に屬する部分として之れを廢止すべき事柄とを附け加へて、戒法といふものをお定めになつて居るのである。その開遮といふ事を忘れてしまつたから、それ故に戒が非常に固陋なものになつてしまつた。そこでその反動の精神は、末法無戒といふ思想が勃興して來て、最早や末法に入つては戒などはどうでも宜いといふので、捨る時分には又極端に一束にして「要らぬものぢや」「要らぬものぢや」といふ事で競争を始めた、「あなたの宗旨は戒は何んです」「俺の方は戒ナンといふものは要らぬものぢや」「こつちだつて戒ナンか要らぬものだ」といふので、戒などを守ることは要らぬものだといふことを誇りとする程になつて參りました。そこで一方には頑迷固陋にして戒を運用すべき方法を知らず、一方は又之れに反對をしてそれを抛つといふやうな事になつて、この偉大なる佛教が、今の惡を止め善を作すといふ所の道德的作用の

上に於ては、非常な無氣力なものに相成つたのであらうと思ふ。これは大きな問題であります、そんな末法無戒ナンと言つて戒は要らぬものだといふやうな簡單なものではなかつたらうと思ふ、その戒の精神を能く咀嚼して、さうして時と所とに適應すべき運用といふ事を、明かにしなければならぬ。

私は日蓮聖人の著眼がそこにあつた事を認めるのである。聖人の遺文の第一頁を御覽になれば、「戒體即身成佛義」といふのである。その次は「戒法門」といふのである。斯の如く戒といふ事に關しては非常に注意して研究をせられて居ります。この戒體義と戒法門の二つの御遺文だけを見ても、日蓮聖人はそんな粗末な、戒といふものを固陋に解釋したり、或は之れを一概に拋擲するといふやうな思想はお探りになつて居らない、十分に研究をしてさうしてその精神を保存して、時代と國家に適應すべく運用をせやうといふことに非常な努力をなされたのであります。その中から現はれて來て、自から日蓮聖人のなされた事は、例へば律國賊論を御主張になるに就ても、これは即ち戒律を固陋に解釋して、國家の一大事は忘れても蚤を殺さぬと言つたら蚤を殺さぬ、國が亡びるやうな大事はどうでも構はぬけれども蚤を殺すのは可哀さうだといふやうな譯で、實に大小輕重といふものが判らなくなつて來た、冬でも單衣を着て傑へて居つてもその方が宜いといふやうな事になつて、國民が皆威目を引いてもそれが戒律を守る所以だといふやうな、洵に固陋なものになつて居つた。それ故に左様な意味の戒律を國民が守れば、却つてその國は亡びてしまふといふやうに、一方には反對をせられたのであるけれども、一方の

末法無戒を主張した法然等に對しては日蓮聖人が何と言はれたか、戒法門を御覽になつたならば、彼等が戒律を全滅して其處に宗教があると言つて居ることを以つて、彼等は非常に末法無戒といふ事を誤解して居るといつて攻撃なさつて居る、如何に宗教であるからと言つても、總ての戒、道徳の觀念を捨てては宗教は無いといふことを極論せられて居ることは、戒法門の一章を讀んでも直ぐ判かることである。一方に律國賊を主張し、一方に末法無戒の極端論を排斥して、そこに本門戒壇といふ事を日蓮は力説されるのであります。

隨つて日蓮聖人の一代の主張および行動の上には、そこに立派な道徳教が起つて居ることである、宗教的にも又世間の方から見ても、日蓮聖人の人格及び主張といふものは、迷信的なものでもなければ唯だち有難主義のものでもない、堂々たる所の國民精神を指導するに足るべき道徳性を帯びて、所謂戒を帯びて現はれて居るのであります。唯だ固陋な戒ではない、又道徳を無視したのもでもない、活きた所の戒である。それ故に立派な道徳の模範者となつて現はれて來て居るのである。

その意味合に於て戒律上の考へが、大體に於て日蓮聖人は全く中正を得て居て居ることが判るのであります、今この「本門戒體鈔」はその事のみを論じ給うたので、茲に摘出した所は普賢經の戒を論ぜられたのである。大體「戒」の問題は、小乗戒と大乘の梵網戒と、それから普賢の戒といふことになり、この關係を詳しく申せば長い話になるから省略しますが、この普賢經に基いて戒を立てられた、

それが三師、一證、一件と申して、その戒を受ける所の作法の上には、この五つの方が要るのである。三師といふは一が和尚、二が阿闍梨、三が教授、これを三師と申して居る、一證は證明者であり、一件といふのは共に修行する同伴衆を指すのである。これが造門の場合に於ては、この和尚が生身の釋迦如來と仰せられて、「靈山淨土の釋迦牟尼如來なり」で、この法華の戒を受ける時分には「誓の音に應ずるが如く、清水に月の寫るが如く」に直ちに感應し給ふ、それ故に「自誓受戒」と言はれた、自ら誓うて戒を受けるのである。自己と活ける釋尊との間に受戒といふことが行はれるのである。これが代理者でやるやうな式がある、禪宗などで能く行つて居るけれども、唯だ坊さんが出て來て剃刀を當て、呉れるとか、頭から水をかけて呉れるといふやうな事をして、「これで宜いから安心をしなさい」、「へい、有難うございます」といふやうな事になつて居る。その中間のさういふものを用ひないといふ事が自誓受戒といふ文字の起る所以である、自ら絶對の佛に對して誓ひを立て、佛から許しを受けて戒を授かつて來るといふ直接的なるものである。その場合に心得を教へる——そんな事を言つても佛が許されるか許されないかといふことは、本人の心得に屬するのであるから、唯だ「下さい」と言つても許されないのである、法華經を信仰する所の心得といふものを持つて居らなければならぬから、それを豫め能く教へて下されるのが教授といふのである。阿闍梨といふのは梵語であります、これは譯すれば世話女房といふやうな意味で、遣り損ひでもあつたら小さい聲で教へるといふやうな譯なのであります。

愈々儀式の場所に出た時に、そこで一つお辭儀をせんならんのをお辭儀をしなかつたとか、その受け答へせんならん言葉を忘れたといふ時に、側から能く世話をし、それから佛様の方に向つても善い工合に取りなして、少々行儀が悪くとも、「あれは足をちよつと痛めて居るものでございますから」といふやうに、その儀式が失敗に了らぬやうに上手に取捌くのが、阿闍梨といふ方の役目である。それは何事でも大事な儀式を行ふ時にはさういふ方が要るものである、昔は坊さんでも説教する時分には會行事といふ者があつた、終ひにはこれが段々廢れて、會行事と言つても小僧が坐つて居眠して居るといふやうな者になつたけれども、本當は芝居をやる時にもやはりあれが附いて居る、黒い物を冠つて後の方に居つて、役者がちよつと臺詞を忘れたやうな時には小さい聲で教へて呉れたりする、あれであります。坊さんの説教でも、會行事といふ者が法座の後ろに居つて、行詰つたり何かした時分にはそれを教へるやうな役をしたものであります。阿闍梨といふのは授戒の時分に於て、左様な親切な世話女房のやうな關係に居る方を申すのであります。和尚は全くその戒を授ける中心の方であります、この和尚を靈山の釋尊といふ、阿闍梨は即ち遮門の場合に於ては文殊師利であり、教授が彌勒菩薩といふことになつて居る、茲に書かれて居る通りの事であつて、それはお經では觀音菩薩に詳しく説いてある。一證は十方の諸佛一件は序品列座の二乘菩薩なりとありまして、法華經の始めに多勢の法座に来て居る人が出て居る、それが皆同伴衆である。斯ういふ事が解釋されて居るのであります、これに就て日蓮聖人は何處に力を

入れられて居るかという、その和尚に就ては「生身の釋迦如來」といふ活ける釋迦牟尼佛を捨て、等覺の菩薩以下と雖も之れを用ゆべきものではない、傳戒と言つて戒を受ける心得の爲には話を聽いても宜いけれども、その戒を正しく授けて下される傳授者といふものは、お釋迦様を除いてはいけなといふ事を呉れ、も論じ、そのお釋迦様といふことに就ても斯ういふ意味のお釋迦様でなければならぬと言つて、遮門の釋尊についてもいろ／＼茲に説明が出来て居る譯であります、小乗の劣應身の釋迦ではいかぬ、通教の勝應身の釋迦でもいかぬ、別教の廢遮那でもいかぬ、圓教の毗盧遮那でもいかぬといふ風に論じて、四教開會の釋迦如來、之れを用ひて和尚となすと仰せられて居る。これは専門に屬する事であるから、詳しい意味はお判りにならぬかも知れんけれども、さうお示しになつて居る事だけは讀んで見れば判らうと思ふ、同じお釋迦様でも本當のお釋迦様でなければいかぬと論じて行き居る事だけは判るであらうと思ふ。

所がこれはまだ遮門を以て論じて居るのである、日蓮聖人は「本門戒體鈔」といふのであるから、そこで本當に現はされた場合には、この「和尚」といふのは、靈山の釋迦と言つたのが本佛の釋迦如來、久遠實成の大神教主の釋尊といふのがこの和尚になるのである、本佛釋迦如來といふものを意識しなかつたならば、本門戒を受ける對手が判らぬことになる、誰からこの南無妙法蓮華經と唱へる信仰を授かつて來るかといふ、その戒師が判らなくなる、恰度嫁に行つて亭主が判らぬといふやうな事になる。そ

んな事は構はぬ、唱へさへすれば宜い、ナンメウ〜で行けば宜いといふのは、それは風來的のナンメウであつて、本門戒を通さない所のものである、それは茲に嚴密に論ぜられて居る。そこで私が前にいふ通り、本門戒などをやかましく言うてはドンドコ法華や雜法華が成立たぬことになるから、頭から『こんな事はどうでも宜いぢやないか、コリヤ〜』といふ主義に導いたものである。『本門三大秘法は大切なりや否や』『それは大切である』『その本門戒とは何ぞ』斯う突つ込まれると二々言目でグツと行詰つてしまふから、そこで『本門でも進門でも何でも宜いぢやないか』と言つて誤魔化す、それは宜しくないことである。日蓮聖人が命にまでかへて主張したる所の正義の宗教としては、さういふ事はいかぬ、何百萬人がそんな態度を取つてもそれは許されぬことである、事と品とに依る、少々位のことはどうでも宜いけれども、大事の本門戒といふものは、これが倒れたならば日蓮主義としての善し悪しといふことが立たなくなる。戒は即ち世間でいへば道德律である、善惡の批判といふものを無くしてしまふのであるから、滅茶々々といふことになる、今は全く滅茶々々になつてしまつて、何が善いやら惡いやら判らない、法華宗なるが故にどういふ事に依つて精神が導かれて居るかという、何もありません、唯だこつちに行つたら厄除のお祖師様、厄年でも厄が除けられる、こつちに行つたら毒消のお祖師様、毒を食つても中らないといふやうな事をやつて居る、それは道德的の觀念でも何でも無い、一個の迷信である。

だから日蓮聖人は本門の本尊に於て本佛を第一に光顯せられた、それから『阿闍梨』といふのがこれが多寶如來である、進門の方はこれが文殊になつて居つた。『教授』は彌勒になつて居るのを、本門に於ては之れを本化の上行等の菩薩となつて居る。であるから法華宗の者は受戒作法からいへば、本佛釋尊を戒師とし、多寶如來を阿闍梨とし、本化の菩薩を教授としてそこに三師といふものが成立つ、この行き方であつたならば間違ひはない、お釋迦様がちやんと眞中にござつて、さうして多寶如來が世話女房役で、遣り損つたら小さい聲で教へて下さる人である、それは有難いけれども眞中の人ではない、それから其處に行く迄の心得をちやんと教へて呉れるのが本化の菩薩日蓮聖人である。さうして大體を教はつて置いて、お釋迦様の前に行つて自誓受戒して、その許しを受けるのである、その場合の證明者としては十方の諸佛、同伴衆としては文殊、彌勒までも加へて悉く之れを同伴衆とせられて居るのである。その事も亦各派に異論は無いのである、學問の上には於ては決つて居ることである、本當の事を教へさへすればさういふ風になるのだけれども、それを教へない。法華宗に於ては回向文、勸請文、に皆さういうて居る、あれは即ち授戒作法の式に依つて『南無久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛、南無證明法華の多寶如來』斯ういふやうに唱へて行き居るのである。

それから尙ほ茲に注意すべき事は、『進門の戒は爾前大小の諸戒には勝ると雖も、而かも本門の戒には及ばざる也』といふ事をはつきり言はれて居る、法華進門の戒は他の小乘の戒に較べては勝れるけれ

ども、本門の戒には及ばぬものぢやとビシヤツと抑へてある、この一言葉で澤山ナンである、それで日蓮の門下は、逆門の戒などといふものに満足すべきものではない、何處までも本門の戒でなければならぬ、それは授戒の作法から云へば唯今申す通りの事である。

そこで然らばその戒體といふものは何であるかといふ事になると、本門に於てはやはり本門の三寶に違背せぬといふ事になる。十重禁戒ではあるけれども、その十重禁戒は——強いて言へばそれは不殺生と言つても、本門の不殺生戒は斯ういふ意味だといふ深い意味にはなるけれども、大體さう違はない、物を殺さぬといふ事でも、信仰を本にして物を虐待たりしないとか、又盗みをしらない、嘘を吐かぬといふやうなことも、本門の嘘を吐かぬのと逆門の嘘を吐かぬのと強いて言へば違つて来るけれども、大體同じものである、唯だ一番終りの不謗三寶戒と言つて、三寶を謗らぬ、三寶に歸依するといふこの三寶式といふものがハッキリ違つて来る。だから本門の趣旨に依つて三寶に歸依せん限りに於ては法華宗でない、日蓮主義でないといふ事がビシヤツと極まる譯である、それでなければ本門戒といふものが成立たぬから、そこで本門の三寶といへば本佛釋尊を以つて佛寶とし、本門の妙法蓮華經を以つて法寶とし、本化の菩薩を以つて僧寶とするといふ事になる譯である。法華宗は南無妙法蓮華經さへ唱へたら法華ぢやと言つたのは間違つて居る、どうしても久遠實成の本佛といふ事を本にして來なければ法華にならない、大體その「本門」といふことも出て來ないぢやないか、唯だ南無妙法蓮華經といふだけでは

本門の三大秘法といふ本門といふ言葉も判らぬぢやないか、本門といふことは本佛を顯本したといふことがきつかけである。それから本門の三寶を以つて宗旨として居るのであるから、そこが安實主義の方から論を立て、言つた言葉に引つくと、さういふ事が判らなくなる。それでどうしても前申した通りに教義の正系といふ事を明かにせんければいけない、一番大事なのはその三寶に背くこと、簡単に之を謗法と言つて居る、法に謗くと言つて居るが、それを詳しく言へば不謗三寶戒である。

その信仰から出て今度は此處に掲げられてあるが如くに、道德の行爲が導かれて來るのである、それは「信は道の本、徳の母なり」といふことになつて、その分に應じたる徳といふものは必ず實行せらるべきものである。その點は洵に日蓮聖人は強く仰しやつて居る、鶏がヒヨコを育て、居る、其處に菩薩の精神が現はれて居る、況んや人間に於てをやといふこの論式を用ひられた。これは孟子などの議論よりももつと強い、王様が牛が殺されに牽かれて行くのを憐れんで、羊を以つて之にかへたといふ事を聞いて、仁禽獸に及んで何ぞ人に及ばざるや、百鈞の重きを舉げて一羽の輕き物が舉らないといふ事はないと論じた孟子のその筆法より、もつと私は徹底して居ると思ふ、鶏がヒヨコを世話をする其處にも菩薩の精神がある、人間が子を産んで子を可愛がらぬ者はない、又多くの親切を行つて居る所のものである、徳の積みぬといふことは決してないといふ事を日蓮聖人は論ぜられた。餘りにこの人間といふ物を詰らぬものぢやといふ風に考へるのもいかぬ、又遣りたい放題に考へるのもいかぬ、今日は些と遣り

たい放題の方が發達をして居る。又一方には無闇に「人間はあかぬものだ」といふ脅し文句を宗教でいひ過ぎたから、今度はナニ義といふ所で亂暴主義になつて來て居る、それはどつちもいけない、信仰を本にしてそこにあらゆる道德の精神がある。その中にはやはり四恩の觀念に主に現はれて來るべきであらうと思ふ。日蓮聖人はさう仰せられて居る。三寶の恩といふ事が信仰的に起つて來れば、父母の恩、國王の恩、衆生の恩と斯う成つて來なければならぬ、蕎麥粉を食つて居るとか、單衣を着て居るといふやうな事に行つては駄目ぢや、蕎麥粉ばかり食つて親の恩を忘れて居るといふやうな事では何にもならぬ、そんな慎打の無い事を以つて戒律ぢやといふから、律國賊論が起つて來るのである。日蓮聖人の一代の御主張から見て、日蓮聖人の本門戒は、國民としては國家の興廢存亡を餘所に見て居る、愛國心を失つたといふことが、やはり本門戒を破る意味になつて來ると思ふ、親に孝行を忘れる、其處に法華信者の人格が缺けて來ると日蓮聖人は論ぜられて居る、「親不孝でも信心さへして居つたら法華の行者ぢや」とは日蓮聖人は言はない、それが法然や親鸞と日蓮の違ふ所である、「親不孝でもナンマイダーを言へば阿彌陀様が救つて呉れる」といふやうに言ふと、宗旨を弘める方には都合が宜いけれども、それは社會の上に悪い影響を與へることになる、お寺は盛んになるけれども家には不孝の子が滿つることになる。日蓮聖人はさういふ風な論式は御遺文中に何處にもない、寧ろ信者にして親孝行の者でもあつたら、それを非常にお褒めになつて居る。親鸞上人などは其處が違つて居る、「親孝行などは自力である

から、自力の觀念が混ると、俺は悪い事をしないからといふやうな自分の力を頼むから、どうしても他方に絶える方が抜けて來る、そこに行くといふやうな事をして居る者が工合が宜い、悪い事をしてモウ鬼が足を引つばつて居るといふやうな事になれば、これは堪らぬといふので只管に阿彌陀様に絶るやうになる、「さういふ風な論式を彼は用ひて居るが、念佛の方は大抵さういふ風にやつて居る、お婆さんなどでも非常な根性が悪くて、モウ逆も阿彌陀様に絶らなければ地獄に墮ることは疑ひないといふやうな事をいつて脅したものである。日蓮聖人の其處が違ふ、それは劣等な志を導くのは其の論式がよい、今でもさういふ論式も少しは使つてもよい、さうしないと向上心を失つて居る人間には教が入らないから、丁度世間に監獄があるやうなもので、監獄に打ち込まなければ眞人間にならぬといふやうな者もあるだらうけれども、屢々之れを行ふたら却つて効力が無くなる。子供を折檻するのも、モウト勉強をして立派な人間にならなければいけないと幾ら言つて聞かせても勉強しない奴は、仕方がないから押入に入れて半日眞ッ闇の中に打ち込んで置くといふやうな事をやる、「今度また言ふ事を肯かなければ押入だぞ」といふと、子供がをとなく「ハイ〜」といつていふ言を肯く、この式もある。けれどもそれは劣等な子供に施す方法である、先づ普通の人間を導くにはさういふものではない、能く言ふて聞かして「お前も立派な人にならなければならぬ、先祖は立派な人ナンだからお前も立派な者になれる」と言つてその向上心の爲に進んで行くやうにしなければならぬ。日蓮聖人の本門戒の精神は其處にある、そ

れを横から難行だナンといふケチをつけるのは、これは餘程の罪惡である、それを又「法華は難行道だ、こつちの方は何も要らない」といふ、その方に騙されて附いて行くといふ事は、如何にも國民自身に暗愚であると言はなければならぬ。であるから本門戒は自分自身相當責任を帯びる觀念が其處に起つて來なければならぬ。大體は本門の戒といつても十重禁戒でありますから、嘘をつかぬとか、盗みをしてないとかいふ事が入つて居る譯であります、それは今申す所の社會の道德であります。



開目鈔講話

(第二十六講)

小林一郎

前回には開目鈔の中で、各宗の本尊といふものが皆正しくないといふことを批評されて居るところ迄を讀んで居りました。要するにこの娑婆世界の我等を救ふ爲に特に御出現になつた釋迦様の御恩といふものを忘れて、さうしてその他の佛に歸依するといふやうなことは、これは本末を顛倒したものである。さういふやうな考で本當に正しい信仰といふものの得られるものではない、斯ういふ意味を非常に懇切に説いて居られます。そのいろ／＼な佛様が御出現になるといふことは、だん／＼これを究めて行く

と、法華經の壽量品の中にある本佛といふものに

なる、そのたゞ一つの本佛が、結局相をいろ／＼に分けていろ／＼な世界に出現されるのであるのだから、その本佛といふことがシツカリとつかまらなければ、信仰といふものにシツカリした基礎がない譯であります。

例せば三皇已前に父をしらず、人皆禽獸に同ぜしがごとし。壽量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ。不知恩の者なり。

支那で言へば、三皇といふ勝れた王様が三人續いて出て、それから初めて人間の道といふものが解る

やうになつたと謂はれて居る。三皇以前には、父も知らず、母も知らず、まるで人間の道を辨へないやうな状態であつた。ところが今の諸宗の人々もこれとよく似て居る。壽量品に説かれた本佛といふものを知らない諸宗の學者は、恰も人間の道を辨へないで、禽獸の如く親子兄弟の別が無いやうなものである。これ等の人々は、本佛釋尊が久遠の昔からこの娑婆世界に住んで、一切衆生を救ふために努力して居られたといふ、この大恩を知らないで、お釋迦様を捨て、居るのである。恩を知らなければ人間の道を知つたとは言へない、畜生同様のものと謂はなければならぬ譯であります。

故に妙樂云く、一代教の中未だ曾て遠を顯さず。父母の壽知らずんばあるべからず。若し父の壽の遠きを知らざれば復父統の邦に迷ふ。徒に才能ありと謂ふとも

ます。佛様が絶対のものでないといふことになれば、佛様の教が永遠に一切の人を救ふといふことも解らないことになるから、さうすると信仰といふものが本當にシツカリした土臺を失ふ譯になる。そんなやうな淺薄な信仰で満足するやうなことは、「才能ありと謂ふとも」まあ一通り佛様が解つたと言つたところで、それは本當に人の子として親に仕へるやうな心持にはなれない、即ち絶対に佛の教に歸依するといふことにはなれない、斯ういふ意味であります。

妙樂大師は唐の末天寶年中の者なり。三論・華嚴・法相・眞言等の諸宗並に依經を深く見廣く勤へて、壽量品の佛をしらざる者は父統の邦に迷へる才能ある畜生とかけるなり。徒謂才能とは華嚴宗の法藏・澄觀、乃至、眞言宗の善無畏三藏等

全く人の子に非ず等云云。

それで唐の妙樂大師といふ人が言ふのに、「一代教」すなはち法華經以前のことをこゝでは言つて居るのでありまして、法華經以前の教が四十何年續いたけれども、それはみな方便の教であつたのだからまだ所謂本佛といふやうな、遠い昔からたゞ一つの佛様が存在して居らしやつたといふことは言ひ顯はさなかつた。併ながら本當に佛の教を信ずるのには自分の親の壽を知らなければならぬと同じやうに、自分達の歸依する佛様の眞の壽命といふことを知らなければならぬ。若しその事が解らなければ、要するに佛様の教がどれだけの力を有つて居るか、又どれだけ大勢の人を感化するかといふことも解らなくなる、斯う言つてある。「父統の邦」といふのは、自分の親が治めて居る國がどれ程廣いか、どれ程大いかといふことが解らないといふ意味であり

は才能の人師なれども、子の父をしらざるが如し。

この妙樂大師は、唐の時代ではモウ末の方に屬して、天寶年中の人である。

妙樂大師は元來天台宗の坊さんであるけれども、天臺宗の事だけを研究したのではなくて、三論宗とか、華嚴宗とか、法相宗とか、眞言宗とかいふやうな、さういふ各宗の事もよく調べ、又さういふいろいろの宗にはそれ／＼自分の宗の根本であるところのお經が定まつて居るのだから、さういふやうなお經も深く見、廣く勤へ、さうしてどのお經を讀んで見ても、法華經の壽量品ほど深いものはないといふことを確めて、それで壽量品の佛を知らざる者は自分の親の治めて居る邦に迷つて居るやうなものだ、斯ういふやうなことを言つて居る。親の恩を辨へない者は人間として人間の道が全うされないのだから

才能があつてもそれは畜生と同じものだ、斯う書いて居るのである。

それで「徒に才能ありと謂ふとも」とありますのは、華嚴宗の法藏とか、澄観とかいふやうな人、或は眞言宗の善無畏三藏といふやうな人々は、随分學問もあり、智慧もある人だけれども、それはたゞ才能があるといふだけの人であつて、佛様といふものが本當に解らないのだから、子供が親を知らないと同じであるといふことを申して居るのであります。

傳教大師は日本顯密の元祖、秀句に云く、
陀宗所依の經は一分佛母の義ありと雖も
然れども但愛のみ有つて嚴の義を闕く。
天台法華宗は嚴愛の義を具す。一切の賢
聖・學・無學及び菩薩の心を發せる者の父
なり等云云。

つたら宜いといふやうにも思はれるのであります。が、併し年の若い者は思慮も分別も足りないものでありますから、たゞそれを可愛がつて甘やかして育てれば、結局ろくな者にはならない。ろくな者にならなければ親の慈悲が徹底しない譯になる譯です。だから可愛がつたといふことが、結局その子供に禍ひをすることに於て、嚴しく教へ諭すといふことは親としては忍び難い事であるけれども、併し場合に依れば嚴しく教へ諭して、その行ひを改めさせるといふことが必要なもので、さういふことが出来て初めて本當の親としての恩愛を全うすることが出来る。だから嚴がなくて愛といふものは全うし得られない、斯ういふ思想であります。これは佛教ばかりではありませんで、一切の教に於て根本として大事なことであります。若し嚴といふシツカリした根柢がなくて、たゞ一切の人間が氣の毒だからこれを救ふといふやうなことでありますならば、その慈悲とい

また傳教大師は日本の國で顯密の元祖である。

「顯」といふのは釋迦様の教のことで、天台宗のことをこゝでは言つて居るのであります。「密」とは大日如來の教を言ふので、眞言宗のことを言つて居るのですが、この傳教大師は天台宗の事も本當によく究めれば、それから眞言宗の事もよく究められて、どちらも元祖と言つて宜いくらゐる立派な人であるが、その傳教大師のお書きになつた「法華秀句」といふ書物の中に言つてあるのには、「他宗所依の經」天台宗以外の宗で尊んで居るところの經といふものは、相當に有難いものであるけれども絶対のものではない、斯ういふことを言つてある。

「愛」といふことと「嚴」といふことは大事なことであります。愛といふのは、例へば親が自分の子供を可愛がるといふ意味であります。嚴といふのは親が嚴しく自分の子供を鞭けるといふやうな意味であります。普通の親の愛と言へば、たゞ優しく可愛が

ふものが決して徹底するものではないのであります。それで「他宗」すなはち天台宗以外の宗旨の方で言ふと、成ほどいろ／＼な善い事が説いてある。即ち母が子を産み出すやうに、佛のやうな悟りを開く本になるやうには見えるけれども、併し「愛のみ有つて嚴の義を闕く」たゞ一切衆生を救ふのが大事だといふことばかり説いてあつて、一切の人間に眞の覺りを與へるといふ、その嚴といふ大事な點といふものが開けて居る。だからどうもそれではいけない。天台大師の始めた法華宗といふものは、嚴と愛の兩方の意味が具はつて居るのである。だからどんな人間でも、如何に智慧の勝れた者でも、或は又「學・無學」といふのは、これから研究する餘地のある者、或はモウ研究する餘地のないといふやうな人でも、つまり佛教に歸依する有ゆる人が、本當に菩提心を發して、自分達の修行を續けて佛と同じ境界にまで到達したいといふ、この大決心をする本に

なる、チヨウド父親のやうなものであるといふことを言つてあるのであります。

前にも屢々申したことでありますが、易しいといふことで人を誘ふといふのは淺薄な事であり、善い事は難かしいに定つて居る、難かしいのが厭なから本當の事は出来やしない、けれども人間といふものが兎角に骨折を吝むやうな弱味を有つて居るものでありますから、早く信者を集めたいとか、自分の宗旨を繁昌させたいとか思ふ人は、そんなに難かしい事ではない、易しい事だと言つて大勢の人を引張る、これは本當の事ではない。今の世でもさうであります、時に流行る宗教といふのは大概易しい事を教へるのです、『ナーニ黙つてお辭儀をして居ればそれで宜いのだ』とか、『そんなに難かしい事を習はなくても、たゞまアお頼み申すと言つて居れば佛様は助けて下さる』といふやうに、簡單な骨の折れないことを言ふと、『あゝそれなら一つやつて見よ

の世に於ての善い行ひが、末の末までその結果を及ぼすといふことを深く信じなければならぬ。この世ではどんなに長く生きたところが百歳まで生きる者はないので大概六十年か七十年で終つてしまふのであります。併ながらこの六十年や七十年の内に於て間違ひをしたら、その間違が後まで残る。この六十年、七十年の間に本當に正しい行ひをしたならばその報ひも後まで残るといふことは考へなければならぬ。譬へば私共が體を悪くして薬を服むとします、例へば腸とか胃が悪くなつた、どうもこれは具合が悪からと言つて薬を服む。その薬を服む時に薬を服む時間は三分か五分の時間だが、その三分か五分の間に良い薬を服めば、その薬が體に廻つて行くと、腸も癒れば胃も癒つて永く自分は救はれる、それと同じである。吾々がこの一生涯の間に於て本當に眞面目な心持をもつて正しい教を信じたらならば、その信する時間が短かくても、その年月が短か

う』といふやうな心持になつて来て、さうして大勢の信者が集るのであります。『自分を反省しなければならぬぞ、お前の行ひを慎まなければならぬぞ、ウツカリして居ては佛様の境界に近づくことは出来ないぞ』といふやうな嚴しい事を言ふと、そんな難かしい事では逆も自分達には出来さうもない、斯う言つて離れてしまふ、それが多くの人の人情でせう。それだから易しい事を説いて、さうして自分の宗旨を弘めるとか易いことが一般の習慣になつて居る。併ながら本當に考へて見たら、吾々がこの世に於て修行が難かしいくらゐなことで失望してしまつてはならぬので、前にも屢々申上げたやうに、人間の命が決してこの世の五十年や六十年で終るものではない、人間の命は三世を貫いた命である。前の世から、この世から、後の世に掛けての三世を貫いた命を有つて居る吾々であつて、その過去、現在、未來を貫いた命の眞中がこの世なのです。だからこ

くても、眞心を以て正しい教を信するといふ、その報ひは未來永遠に、後の後まで残らなければならぬのである。そこを考へて來ると、この世に於ける私共の信仰といふことが非常に尊く思はれて參るのであります。

それでどんなに骨が折れても、骨の折れるくらゐの事を恐れてはならぬのである。兎に角この世に於ける吾々の信仰、吾々の努力といふものが、永遠にその結果を残すものであるといふことをよく辨へて行くならば、どんなに骨が折れても、そんな事は何でもないといふくらゐな心持を持たなければならぬ譯です。それだから法華經をよく讀んで見れば、法華經の中に、この經の信心が易しいといふことを何處にも書いてありはしません。法華經の始めから終ひまで何處を讀んで御覽になつても、易しいことだ、他愛ないことだ、骨の折れないことだといふことを一つも書いてない、みな難かしいぞ〜と言つ

て居る。始めから終ひまで、斯ういふ信仰を持つことは大變な事だ、斯う言つてある。それは固よりその道理であります、骨折らずして善い事が得られるものではないのです、いゝ加減にして置いてそんなに利益ばかり得るといふことの出来る譯のものではないでせう。だから愛ばかりあつて嚴がなければいかぬと言ふのです。たゞみなを甘やかして置いて、『いゝ加減にやつて居ればうまい事が出来るぞ』そんなことを教へて居つては本當の信仰になりはしない。シツカリした、本當に正しい道を飽まで信じて行くといふことでなければならぬ。斯ういふことが言つてあるのでありまして、これは本當に大乘の修行をする者の、みな辨へなければならぬことであらうと思ひます。

眞言・華嚴等の經經には種・熟・脱の三義名字すら猶なし。何に況んや其義をや。華嚴・眞言等の一生初地の即身成佛等

は、經は權經にして過去をかくせり。種をしらざる脱なれば、超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし。宗・宗互に權を諍ふ。予此をあらそはず、但經に任すべし。

それから尙ほ進んで言はれるには、『眞言・華嚴等の經經には種・熟・脱の三義名字すら猶なし、何に況んや其義をや』とあります。これは前にも申上げたこととありますが、佛の教が與へられて、その結果が現れるのを、チヨウド田の中に種を蒔いて、それがだん／＼成熟して来て、穫入れをする迄の間に譬へたので、これを三つに分けて、一番初めの『種』といふのは、所謂種を蒔くこと、『熟』といふのは、その種から芽が出て、そこに穀物がスツカリ出來上ること、『脱』といふのは、その出來上つた穀物を穫入れることとあります。この種・熟・脱と

いふことを極く簡單に考へると、お釋迦様の御一代に於てもこの三つがあるといふことが言へる。即ちお釋迦様が一番初めに教をお説きになつたのが種である、種といふのは略した言葉ですが、モット詳しく言へば『下種』といふことであります。それからお釋迦様の御一代の間に教をだん／＼伺つた者が迷ひを離れて行くことが出來て、さうして佛の本當の教をお説きになつた御趣意が解つたといふことが所謂『熟』であります、まア穀物が出來て熟したやうなものである。それから一番終ひに、佛の世の中に出て教をお説きになつたのは、一切の人間をみな佛様と同じ境界にしてやらうといふ爲であるといふことが解つて、自分達も永くこの大乘の教を學んで、結局は佛の境界に到達するまで骨折りたいといふ決心をしたといふことが所謂『脱』すなはち穫入れをしたといふことであります。だから極く短かいところで言へば、お釋迦様の御一代に於ても種・熟・脱とい

ふことはある。併しモット深く言へば、その下種すなはち種を蒔かれたといふことは、お釋迦様が印度に御出現になつてからの事ではない、ズット昔から佛といふものがある。何も百年や二百年以來の佛ではないのであつて、永遠の命を有つて居らつしやる佛様であるのだから、その佛の教が世の中に利益を與へられるといふことが、今の百年や千年の間の事ではない、遠い昔からだん／＼續いたことである、斯ういふことを考へなければならぬ。それを考へて初めて種・熟・脱といふことが本當に解るのであります。若しこの世の五十年や六十年のことであるならば、それが未來永遠にその効果を及ぼし、その利益を與へるといふことも本當には信じられないでせう。ズット遠い昔から續いた力であるから、又それが後の後までも續く大きな力であるだらうといふことも無論信じられる譯であります。

ところがさういふ久遠の昔からの佛様といふやう

なことは、法華經壽量品以外に於ては、假令説かれてあつても極く淺薄に説かれてあつて、本當に説かれて居るのではありませぬから、それで眞言とか、華嚴とかいふ宗で重んじて居る經では、只今申した種・熟・脱の三つの名義さへもない、況してその深い意味を現はすといふことはない、斯う斷定されたこれは、確にその通りであります。

それから華嚴宗とか、眞言宗とかいふやうな宗で重んじて居るところの經の中に於ては、だん／＼大乘の修行を積んで行つて、佛の境界に近づくといふことだけは説いて居る。即ち「一生」といふのはこの世といふことで、この世に於てだん／＼と修行して、さうして「初地」といふのは、自分の信仰が自分のものになつて動かなくなつた状態に入つたことでありますが、その自分の信仰が動かなくなつて佛に成る、斯ういふことだけは説いてある。それは法華經の中にも説いてあるけれども、法華經に限

はないのであります。それだから法華經の壽量品に説かれた本當の意味が解らなければ、眞の信仰を勵み、眞の信心を續けるといふことの出来るものではない。

支那の秦の時代に「超高」といふものがあつて、これは家來であつたけれども後には王を排斥して王の位に登つたが、間もなく王の位を失つてしまつた。又日本では弓削道鏡といふ者が皇位を奪はうと考へたけれども、和氣清麿等の人々の忠義に依つてその野心はまるで覆されてしまつた。それと同じことで、壽量品に説かれたやうな久遠の佛といふものを知らないで、方便の教だけで本當の教を立てよう、本當の信仰を勵まざうといふことの出来る譯のものではない、この事をよく考へなければならぬ。併し一つの宗を立て、見ると、自分の宗の繁昌といふことが主になるから、そこで「宗々互に權を諍ふ」どの宗でも自分の方が上だ、斯う言つて他の宗を皆壓服し

つたことではなくて、佛の大乗の教を信じて、自分達かだん／＼煩惱を除いて佛の境界に近づくといふだけのことならば、他の經にも説いてあるけれども、そのいろ／＼な經の中に於ては過去を隠してある。過去といふのは法華經の壽量品にあります、久遠の本佛、本當に遠い昔から一つの佛が居らつしやつて、その一つの佛がその場合／＼に應じていろいろな佛と成つて現れて、一切の人をお教ひになるのであるといふ、この根本の事に就てはこれを隠して説かれて居ない。だから種を蒔いたことを知らないで、その穀物の熟する方だけを求めて居るといふやうなことだから、それでは宗教としては本當のことではない。佛の絕對性を知らないで、佛に絕對に歸依することの出来るものではない。絕對に歸依することが出来ないで、その教が心から力になる譯はない、いゝ加減な弛んだ心持で佛の教を信じたり、學んだりして居て、それが永遠に自分の力になる譯

てしまつて、自分の宗だけが大きい勢力を得るやうになりたいたい、斯う思つて居る。併し「予此をあらそはず」日蓮上人はそんな一つの宗を立て、他の宗と對立するといふ、そんな考はテンドテ持つて居らない、唯だ「經に任すべし」經文に基いて、その經文の通りを信じて、又經文の通りを實行して行くといふことより外ない。その心持で一生涯を佛道の修行、又教の宣傳といふことに捧げて居られるのである。

これは日蓮上人が幾度も言つて居られるのであります、だん／＼世が末になつて來るといふ／＼な宗が分れ、派が分れるといふことも洵に已むを得ないことのやうであります、その宗を開き、派を開いた人は、假令何等の野心がないとしても、そこに宗と宗とが相對し、派と派とが相並んで争ふことになると、その争ふといふ中には私の心持が入つて行く、それだから本當の精神が隠れてしまふ。唯だ一つの宗を盛んにし、一つの派を盛んにするといふこ

とのみに皆が没頭するやうになるのであります。それではいかぬ、それはどうしても經に任せる、佛の本當の教といふものを根本として、自分の信仰を立てるといふことでなければならぬ筈であります。

法華經の種に依て、天親菩薩は種子無上を立たり。天台の一念三千これなり。華嚴經乃至諸大乘經・大日經等の諸尊の種子、皆一念三千なり。天台智者大師一人此法門を得給へり。

そこで本當に法華經の精神を發揮する者は皆この大事なことを言つて居る。例へば印度に出現した天親菩薩といふ人は、法華經といふものを本にして、『十無上』といふことを言つて居る、十無上といふのは天親といふ人が『法華論』といふ本を書きまして、その法華論の中に十無上といふことを言つて居るのであります。法華論といふのは法華經を説明する爲

消えてしまふ譯です、水の中に火を放り込めば火が消えたと同じことです。有難いことに吾々には佛性といふ、佛と同じになるやうな尊い性質が具つて居る、それが『種子』といふことでありまして、この種が伸びて行くのには佛の眞實の教を學んで行くより外ない。佛の眞實の教を學んで、自分の本來持つて居る尊い性質を伸ばして行く、大きくして行くといふことに努める時に、そこで初めて凡夫であるところの私共が佛に近いやうな境遇にも到達するところが出来るのであります、これを『種子無上』と申します。

佛様は教をお説きになる時には一つも無理がないのであります、何も私共に出来ない事を一つもお教へになつては居りません、骨を折つて行けば必ず出来るぞといふことばかりをお教へになつて居る。何故なら、吾々には佛性といふ佛と相通ずるところの性質があるのだから、吾々が努力して行けば、その

に書いた物であります、その法華論の中に十無上と言つて居る。十無上といふのは本當に眞心を持つてこの法華經を信すれば、『無上』——即ちこの上もない尊いことが十種も現れて来る、斯ういふことが説かれてあります。その十無上を今此處で一々申上げるにも及ばないのでありますけれども、その十無上の一つとして『種子無上』といふことを言つて居るのであります。種子といふのは草や木を生み出すところの種といふことであります、種がなければ草も木も生えては來ない、それと同じやうな譯で、吾々が如何に大乘の教を學ぶとか、佛を手本として修行をしたいか考へて見ても、自分自身の心の中に佛と同じに成れるやうな尊い性質がないならば、その信心といふものは殆ど役に立たない。水の中に火を放り込めば火は皆消えてしまふのです。若し吾々に佛と成り得るやうな尊い性質が具つて居ないならばどんな教を聞いても、どんな事を習つても皆それは

本來具へて居るところの尊い性質が育つて伸びて行く、それが育つて伸びて行けば、今凡夫であつても一歩々々と佛の境界に近づいて行けるのだ、その事を明にお示しになつて居るのでありますから、少しも無理な事ではない。但し佛の教を信する者としては、無理だと思ふことを實行するぐらゐな心持でなければならぬ。小さい時には道を歩いて見ても、初めは一里ぐらゐしか歩けないのです、その一里くらゐ歩ける者が一里だけ歩いて其處で止つたのでは決して足は達者にならない。一里歩ける者が一里五丁歩いて見、又一里十丁歩いて見る、これは必要です。初めの内は骨が折れるが、一里歩ける者が無理に足を引張つて一里五丁歩いて見る、斯ういふ事を重ねると一里五丁樂に歩いて来る。一里五丁歩ける者が無理に足を引張つて一里十丁歩いて見る、これを幾度もやつて見ると一里十丁樂に歩いて来るやうになつて来る。人間が努力しないでは自分がどれ程力を

具へて居るか、どれ程價值を持つて居るかといふことは判りはしない。何時か申したと思ひますけれども、多數の人は一生涯に一度も一生懸命にはならないから、結局自分がどれ程力があるかといふことは知らないで死んでしまふ。これ程恥しいことはない、又これ程情けないことはない。今の世の中でも随分さういふ人があると思ふ、生れるから死ぬまで一度も一生懸命にならない人がある、毎日々々フラフラやつて居つて何時の間にか腰が曲つて死んでしまふ。さういふ人は一度も骨を折らない人です、隨つて少しも自分の力を知らない人、自分の價值がどれ程あるかわからない人です。これは人間としては情ないこととせう、けれどもさういふ人が決して世の中に少くないのであります。

私はよく谷中の墓地や青山の墓地などを通り抜けて見て、澤山のお墓のあるのを見て思ふのですが、斯ういふ墓の下に埋つて居る人で世間から少しも價

ば各自に具はつて居るところの佛性を發揮することが出来、たとひ人が見ても見なくても、世間から認められても認められなくても、自分が利害損得を離れた心持を以て、自分に與へられたる仕事に全力を打込むならば、この骨折の結果は永遠に朽ちないで、滅びないで残つて行くのだといふ、この大事なところを捉へるか捉へないかといふことが非常に大切な點でなければならぬ。そこを捉へないで終るといふことであるならば、それは折角尊い佛性を具へて居ながら、その佛性を具へた甲斐がなくて終る人でせう。幸に佛の尊い教に依つて自分達の目が覺めて、その尊い佛性を開發し、これを長じて行くといふことに力を盡すことが出来るならば、初めて人間として生れた甲斐がある譯である、その點を捉へて「種子無上」と言ふのです。人間が尊い佛性を持つて居る、又その尊い佛性を發揮せしむべく佛の眞實の教が與へられて居る、その教といふものと吾々

値を認められないし、又實際その人の骨折つた結果が何處にも遺つて居ないといふやうな人も随分あるだらうと思ひます。けれどもさういふ人が皆つまらない人ではない、皆骨を折つて行けば佛にも成れば菩薩にも成り、世の爲め人の爲にも役に立つといふ本性を持つて居るのだけれども、その本性を發揮する機會がなかつた、自分がさういふ尊い性質を持つて居るといふことを自覺する機會がない、たゞ毎日の眼の前の利害損得を逐うて、あゝやつたら得だとか、斯うやつたら損だとか言つて居る間に、頭も禿げれば腰も曲つて死んでしまふ、さうして結局は小さな墓石の下に納つた譯である。これでは何の爲にこの世の中に生れて來たのか譯が解らない。併しこれが大部分の人です、實にこれは情ない、淺ましいこととあります。

それだから吾々が佛の教を學んで、佛の教を信じ、今の自分は凡夫であつても、大いに奮つて行け

の佛性といふものと相俟つて、さうして「無上」の、何にも比べられないやうな善い行ひが出来、善い結果が後まで残つて行く、これは無上と言はざるを得ない。だから種子無上といふことを法華論の中に申して居るのであります。

天台大師が「一念三千」といふことを言つたのもそれと同じことである。この一念三千といふことは前にも屢々申したやうに、今の自分達は凡夫であつても、この凡夫である吾々の心の中に、自分を佛にすべき尊い性質も具はつて居る、斯ういふことであります。このところをシツカリと捉へて行かなければ、本當に信仰を勵む心持は起きない譯です。

それで華嚴經とか或はその他の大乘經とか、大日經などの中に現れて居るところの佛や菩薩が勝れた徳を具へて居るといふことも、その「種子」すなはち如何にしてさういふ徳を具へられたか、どうして廣大な智慧が具はつたかといふ原因を考へて見れ

和歌

本郷日常

勅題 朝陽映島

朝日かけ大和島根に照り映えて

大陸の空晴れわたりゆく

西宮一露

伊勢大神宮

黎明の白木の宮に顔づきて

神代おもへば遙かなるかな

ば、それは皆天台大師の言つた一念三千といふ事の中に納つてしまふものである。即ち人々がみな生れながらにして佛と成るところの本性を有つて居るといふ。その根本がよく解れば、初めは凡夫であつた者が、佛に成つたとか菩薩になつとかいふことの解釋もみなつのであります。その根本を辨へないでたゞ形に現れたところばかりを穿鑿して見ましたところが、決して本當の事は解らないのであります。支那にもいろ／＼な學者が出たけれども、天台智者大師といふ方だけは本當に法華經を心から信じて居られたから、「此法門を得給へり」この教を自得することが出来たのである。

ところがこの天台大師の發表された教といふものが非常に尊いものでありますから、支那で佛教を弘めた人が皆これを読んで、さうしてこれを自分の宗旨の説明に應用をして居る、その事實をこれから先に書き連ねてあります。(次續)

誓願を起せ

磯部満事

「一年の計は元日にあり」と謂はれてゐるが、事變第二年を迎えて總力戦の用意も各方面では、水も漏さぬ計畫が進められ洵に結構のことに思ふ。併しその根本は無論一つであらねばなるまい、その一つとは申す迄もない「人格」である。どれ程制度を協定しても、立法を完備してもお膳立ては出来てもこれに磨り、これを活用する人達の人格に不十分であるならば、遂にその目的は貫徹されないで終るであらう。世間の落伍者を見れば、そこに必ず人格の缺陷あることを思ふ時に、此際吾人は彌々この人格を各自向上せしむることを忘れてはならない。戦争の勝敗は第一線のみあるべきものではない、これを左右するものは實に國民の人格にあるといふことを深思せねばならぬ。

そこで人格といふことに就ては先づ人間をシツカリ意識せねばならぬ、人間！實に不可思議の者である。この人間はどうして生れ、又どうして死で逝くのか。人類の生活に於て第一の問題は實に生死である、世間では生れることは芽出たといつて喜ぶが、死といふことは恐ろしく厭がる、殊に正月早々から死などは縁起が悪いと叱られるであらう。けれども縁起が悪いものは消えて無くなるとか共その死なるものは消えて無くなるとか滅び失せると思ふ考へ方を是正せねばならぬ。かの源俊基は「古來一句、生無く死無し、萬里雲盡き、長江の水清し」と吟じ、楠公は生死の兩頭を裁斷して盡忠報國の赤誠を竭されたことは有名である。即ち毎日さし昇る太陽を拜するにしても、旭の東天に出る時は何となく莊嚴

なもので気分が引立つ、併し夕陽の西に没する時は消極で心細い様に思ふであらうが、何ぞ知らんこの夕日こそ西の國では朝日なのである。そこに太陽自身としては何等の出没はない、唯吾人の見る側に於て感情に變化を示して居る譯である。これが納得出来れば、生死に就ても縁起のよい悪いと騒がずに済むであらう日蓮聖人は、

夫れ生を受けしより死を免れざる理りは、賢きみかどより卑き民に至るまで人ごとに是を知ると雖も、實に是を大事とし是を敬く者千萬人に一人もあり難し。

——聖恩問答抄——

と、この生死を辨へないで人生の荒海を乗切らうとすることは甚だ無謀である。

所謂醉生夢死のはかない日常である。

人の壽命は無常也、出る氣は入る氣を待つ事なし、風の前の露命たとへにあらす、賢きもはかなきも老いたるも若きも定めなき習ひ也、されば先づ臨終の事を習ふて後事を習ふべし。

——妙法尼抄——

かゝる禪りお互はこの生死の問題を豫め窺つておきたいものである。然るに昔しから此の生死に關しては孔孟の教にも明されてない。神道には無論のこと。近代科學萬能の世を謳歌する科學者達にもこの科學が眞理を探究すべき筈であるのにも拘らず最大要義である生死のことに對しては未解決で、纔かに機械的に現象と現象との關係を指示し説明するのが關の山なのである。では西洋哲學はどうか、ソクラテス、オイケン、ベルグソン等今日迄知られた學者中に一人としてこの問題を完全に解決して居る者がないではないか。顧て宗教の側に於てどうか、

現在數量の上からは世界最大と誇る回教に於ても、又耶蘇教に於ても、彼等は創造説や因果縁無の思想で、神人別質論に誇つてゐる状態だから、どうして根本の神觀に對しては、全く論義すべき性質のものでない、只仰いで信ぜよといつて明さない、否明し得ないのである。従つて生死觀に於ても甚だ幼稚なものである。それが日常生活上に禍を來たし漸次唯物的に流れ、經濟第一義的に引きずられた有様となつて今や人類行詰り社會破滅の歌を發して居る。

佛教はどうか、明治の教育をうけた人の間には、佛教を目して迷信であると斷定せる政治家もあつた。佛教は厭世教である、平等論である、我國體には容れられないといつた儒者もある。而してそんな儒者を人格者だと推薦せる軍人や公卿もある。佛教は外來思想である、獨善的だ、個人解説を説き天下國家を忘れたものだといふ國學者もある。併し是等は悉く皆自己の暗愚を暴露せるものであり

自己の淺識を標榜して居るに過ぎないのみならず、畏くも 歷朝を輕侮せる許し難い非國民共である。今や日支事變に伴ひ一段と我國の精神文化を高調して、大に世界を教はねばならぬ重大時機に臨んでゐるではないか。或る外交官は「他國民の精神的な畏敬と愛情を培ふ國際文化事業が、必然的に一國の外交に先馳し、後裝されねばならぬ。若しも獨善的な文化觀に捉はれ固陋な論議に次いで、文化的鎖國論をなすことあつてはならない」と叫んでゐる。流石巧妙な言ひ廻し方である、耳の痛い連中も其處邊にあらう。

釋迦牟尼世尊の教は實に深淵な哲理を有ち燦然たる文化を蔽し、崇高な道義を教へた陶文微妙な宗教である事を知らず、群首蠢衆的にこれを批判する如きは極めて恐るべき大罪惡である。而かもそれを天下に高言し、之を惡宣傳するに於て益々世間は安穩でない。正しい教法を諱諱し違背する罪科は、いかなる佛も神も遂に救ひ難い極惡重刑とされてゐる。

心ある者謹しみて慎み、恐れても怖るべきである。

三千年の昔、釋尊が臘月八日、遂に大悟され三明を得、正念圓滿の大法悦に住し給ひ、その限りなき慈念を以て衆生の救護にお立ち下さつたが、猶ほ四十餘年の間は人々を中心とされた隨他の教であつたから、未だ眞に生死は離れ難い。所謂人生苦の世界であり、生も苦なれば死も苦である、所求不得の苦、怨憎會の苦、愛別離の苦等數へ來れば三界は皆苦である。又諸行は無常である、決して常住を許さない。世は皆牢固ならざること水沫泡焰の如しである。而して諸法は無我である。一切は皆空に歸すといふことから化導されたが、その晩年自ら出世の本懐をお説になつたと云ふ法華經には、此等の法門に執著せる者を顛倒の衆生とも阿僧祇とも、本心を失へる者、又狂子とも説かれたから、お弟子達の驚きも無理からぬ事であつた。「我が所説の經典無量千萬億にして已に説き、今説き、當に

説かん、而も其の中に於て此の法華經最も爲れ難信難解なり」と、釋尊の仰せられた意味は深い。其後支那の天台智者大師が、一念三千の義を立て、思案の佛教にされた後、禪宗等は見性成佛の果實を得やうとして冥想の佛教にした。これと前後して念佛や唱題行に依る信念の佛教も現はれた。けれ共この信念の内容に於て兩者に非常な大差がある。即ち汝然上人の主張は、教主釋尊を捨て、彌陀の誓願に隨ふ様であるが却てこれにも叛き獨自の見解を以て捨閉闍地を叫び、惡人正機といつて道德と宗教を分離せしめ彌陀念佛一行を鼓吹した。日蓮上人の信行は、飽迄も正直に佛勅を奉じ、經文其儘の實踐に歸め、教主釋尊から遣された如來使として幾多法敵の迫害にも克く忍難、以て正法護持に命懸けであつた。

「此法華經は如來の現在すら猶ほ怨嫉多し、況んや滅度の後をや」けれ共「佛を敬信して當に忍辱の鏡を著るべし、是の經を説かんが爲の故に此の諸の難事を忍

ばん、我身命を愛せず、但無上道を惜む」と、而して「我は是れ世尊の使なり、衆に處するに畏るゝ所なし、我當に善く法を説くべし、願くは 佛安穩に住したまへ」の經文を身に實行されたのは、佛滅度後 日蓮上人唯一人であつた。「如來の滅後に於て、佛の所説の經の因縁及び次第を知つて、義に隨つて實の如く説かん。日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人間に行じて能く衆生の團を滅し、無量の菩薩を教へて畢竟して一乘に住せしめん」とする斯の人、即ち日蓮上人に依つてのみ佛教の眞精神が後代に敷衍するゝ次第であり、末法應時の大導師であること疑ひない。然るに世の人、上人に近づかんとも希はず、佛教の妙味を嘗めやうとせず、朝夕浮草のやうな生活に終始してつひぞこの大事な問題に觸れず、折角人間に生れ乍ら何等禽獸と擇ぶ所ない本能生活にあかし暮すこととで、それでどうして世界的に大陸進出が出来やうぞ。唯物主義に屈伏して居る

者が、どうして物心一如だとか、日本精神だといふことが出来やうぞ。それは恰度酒に泥酔せる者が、未だ酔つてはゐないぞといふに等しいものであるまいか。折角貴い寶珠を懐にしつゝ、それに心付かずして、頑迷固陋振りを發揮しても、そこに深義のないものではどうして先進諸國をリード出来やう、彼等を導かうとする前に先づ自身を反省するがよい。

『釋尊の出でまさる時は、三惡道增長し、阿修羅亦熾んなり』と法華經に説かれて居る、佛教を排棄してどんな文化を持つのか、いかに人格を崇高ならしめるのか結局至誠の人たり得まい。『佛になる道は善知識には過ぎず』と古聖は仰せられた。佛になる覺悟を有たぬ程の者がどうして人たり得やうぞ、『善知識は是れ大因縁なり、所謂化導して佛を見、阿耨菩提の心を起すことを得せしむ』と末法の善知識は本化の上行等の大菩薩であらねばならぬ、率直にいへば日蓮上人であることは既述の通り最早議論の餘

地はない、この日蓮上人の言葉として、兩前(法華經以前の經)述門(法華經前半)にしては猶生死を離れ難し、本門壽量品に至つて必ず生死を離るべし。

又、
兩前述門は全く出離生死の法にあらず但専ら本門壽量の一品に限りて出離生死の要法なり。

其他、
眞實の斷惑は壽量の一品を聞きし時なり。

と、生死から離れるには、本佛釋尊を拜することが根本をなすのである。世間には人格實在を否定せんとする佛徒もあるが、これは權門の輩である。『佛の入滅は既に二千餘年を経たり、然りと雖も法華經を信する者の許に、佛の音聲を留めて時時刻刻念に我れ死せざる由を聞かしむるなり』とも亦『法華經を信せざる人

の前には、釋迦牟尼佛入滅を取り、此經を信する者の前には滅後たりと雖も佛の在世なり』と守護國家論に示されてゐる。

そこで吾人の佛性論に就ても、先づ佛身論から確立せねば、佛性も明瞭にならぬ。たとへば日本人といつても、御皇室を戴いて居るから日本人である、日本人を知らうとするには先づ御皇室を拜する時に、一切は領解されて來る、順序を誤つてはならぬ、日本は決して國土や人民を主にして、成立して居ない事は幼童と雖も知つてゐる事なのである。佛教も亦復この通りなのである。壽量本佛の光顯に依つて一切經は隨ふであらう。日蓮上人の力説を拜するに、
本門(壽量品)にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果を破れば四教の因やぶれぬ、兩前述門の十界の因果を打破つて本門の十界の因果を説き顯はす、これ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備

りて眞の十界互具百界千如一念三千なるべし、……此壽量の佛の天月しばらく影を大小の器にして浮べ給ふを、諸宗の學者等近くは自宗に迷ひ遠くは法華經の壽量品を知らず、水中の月に實月の想をなし、或は入りて取んと思ひ、或は繩をつけてつなぎとどめんとす。

開目抄

有名の一節である。爰に大日如來でも、阿彌陀佛でも、業師如來でも、其他の佛、菩薩、一切の神明は迹化である事が立證され、下つて吾等大衆も、この迷へる凡愚の身中に御佛の妙相を備へて居ることに心付いた時、勇躍歡喜して感涙押へ難い。併し唯佛界を具備してをる丈けでは理論で、實際上の活用となつて外に働き出さねば値うちはない、然らばそれにはどうすればよいのか、眼目は一にかかつて此處にありとする。日蓮上人の仰せに、

正直に方便の教を捨てて、但法華經

を信じ、南無妙法蓮華經と唱ふる人は煩惱・業・苦の三道、法身・般若・解脱の三徳と轉じて、三觀三諦即一心に顯はれ、其人の所住の處は常寂光土なり。

當體義抄

圓の行まぢまぢなり、沙をかすへ大海をみるなほ圓の行なり、何に況んや兩前の經を讀み、彌陀等の諸佛の名號を唱ふるをや、但しこれらは時時の行なるべし、眞實に圓の行に順じて常に口さすみにすべき事は南無妙法蓮華經なり。

十章抄

問ふ、其義を知らざる人、唯南無妙法蓮華經と唱へて解義の功德を具するや否や、答ふ小兒乳を含むに其味を知らざれども自然に身を益す、香婆が妙藥誰か辨へて之を服せん、水は心無けれ共火を消し、火は物を燒くに覺覺有らんや。

四信五品抄

法華經の藥王品には、

此經は闍浮提の人の病の良藥なり、若し人病あらんに是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。

とある。是等に依つて之を見れば妙法蓮華經は吾等愚鈍の迷蒙を菩提化さるべき良藥であり、不老不死常住實在の妙典である。而してこれは單にお經文として文上に説かれた丈けのものと思つてはならない。その生きた事實が法華經滿出品と如來壽量品に示されて居るのである。

有難い事には大恩教主釋尊こそ、かの

印度御降誕の八相成道を示現された佛陀であり、實に久遠本佛釋尊に在しましたのであつた。佛陀の實在は、又吾等の常住である、所謂十界事常住なんである。

そこでこの壽量釋尊の光顯から、三界は皆我有なりの權威も、唯我一人能爲救護の身・口・意三輪妙化も、吾等は無始已來大恩寵に浴して來たのであつたが、途中計らずも我儘から退轉して遂に貧しい迷

子となり、大御親の慈悲を忘れて居た。今度幸にも善縁の薫發に依り、善知識に親近し再び本佛の御許にかへることが出来、そこに生死の大問題も解決し、鷲峰の覺月をも拜することが出来る次第なのである。

今本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出でたる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず未來にも生ぜず所化以て同體なり。此れ即ち己身の三千具足三種の世間なり。

——觀心本尊抄——
熱拜すべき聖訓である。

以上若干理論めて面倒となつたが、宗教の妙味は徒らに理窟を捏ね廻してもそれ必ずしも悟りは得られない、生死出離の要道も不可能であらう。本多上人は宗教の悟りは智慧からでなく、信心から法悦にひたるのである。我が精神に歡びを感じる時こそ悟つたといへるのだと仰せられてゐた。この法悦の心境は正法正師の正義を信じて、如來壽量品に示さ

れた是好良樂の南無妙法蓮華經を受持口唱する處に自ら與へらるゝ特典である。日蓮上人は「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、吾等この五字を受持すれば自然にかの因果の功徳を譲り與へ給ふなり」と仰せられた。本師釋尊の始めない始めから、盡十方に廣く、三世に高く累積された大功徳の結晶を妙法蓮華經の一音として末代幼稚の吾等にたまはるのである、故にこの五字七字の中に本佛釋尊の神通力も、智慧力も、慈悲力も、功徳力も、善根力も悉く一切が含有されて居るから、この妙法蓮華經の一丸を服用する時にこそ、吾等の煩惱に纏繞せる穢い心も漸く清淨に磨かれ、遂には玲瓏珠の如き靈光を發するに到るのである。

かゝる唱題の修行は洵に行じ易い様ではあるが、その内容には量り盡せぬ深さがあり、數へ切れない徳があるから、決して簡單なものではない、偏へに清淨の一心を以てせば如何なる無信根の者でも

何日とはなしに、自然に御佛に感應し、高らかに口唱する様になる、其時は人格が一變したので全く不可思議の法門である。

幸にして吾人の人格が向上すれば、従つて屬性の智情意も俱に展開し誕生する世間では人格者といへば、「お人好し」無能力者のやうに思ふ者もあるが、さうでなく、凡そ至誠の發する處、智仁勇は對手に應じて活躍するものなのである。かくてこそ社會的には人類文化の光が輝き國際的に東亞親善、世界平和の理想境が出現するに到るであらう。

寔に一天四海皆歸妙法こそは、日本人の大誓願であらねばならぬ。釋尊の「我滅度の後後の五百歳の中、閻浮提に（この妙法を）廣宣流布して斷絶せしむることなかれ」の佛勅を信奉し、隨喜することでありたい。護法愛國の士女よ、願くば速かに正定聚に入り、この至善最高の文化建設に勇精されたいものである。

南無妙法蓮華經

私利と公利

上 田 辰 卯

總動員法第十一條發動に對する軍當局の談といふものは、財界を刺戟すること多大なるものがあつた。自由主義の夢の醒めない連中、營利にこりかたまつた連中、かういふものは等しく苦い顔をしたであらうが、心ある者や私利か公利かといふことに迷ひ初めた人達は、極めて明瞭な指導精神として會心の笑をもらした。支那事變といふものは軍事的にも政治的にも随分大きな意義を持つたものだが、一面國民の經濟觀念といふものを根本的に覆へした點に於て、實に大きな効果を齎したものと云へる。

私利のための經濟活動が、やがて公利を結果するものだといふことが從來の道德觀念であつた。私利利益といふものに道德性を付與せんがための附會の議論とばかりは云へない。今日迄の文化の發達は私利が促した經濟活動の賜であつたとも云へるのだ。然し私利は依然として私利であり、究極する所公利と背反するものであることが事變によつて證明されてしまつた、そのためにこゝに總動員法の發動となつたのであると思へる。

今度の事變で物資の大動員をやつて見て、日本で無くてならない仕事が振はない事實がよく解つた。

反對になくてもよい仕事に多分の資本と勞働が費されてゐることが解つた。それは今日迄無くてならぬ仕事は利益がなく、どうでもよい仕事に多分の利益が得られたからだ。物資の統制で第一番に擧げられたガソリンの如きも、日本でやればやれる液化事業が利益がないために、今日迄手を付けられずにあつたのだ。私益といふことが何等不道德でなく、寧ろ國家も國民もそれを獎勵したために、事業家は私慾を滿せない仕事なるが故に、又資本家は自己の利益を犠牲にすることを恐れるが故に發達しなかつたのだ。然るに一度戦争となつて見ると、その儲からない仕事こそ國家になくてはならない仕事であつたことが解つたのだ。これは單にガソリンばかりではない、今日統制を加へられた物資は悉くそれなのだ。

x

x

經濟統制に對して非難をするものは常にかく云ふ。國民の自由活動を抑制すれば事業の創意が萎縮し生産力が衰退すると、或はそうかも知れない。少くとも今日のやうにまだ日本國民が國家即自己だといふことに自覺し切れないでは、生産力衰退の危険は多分にある。然し残念ながら今日では最早衰退してもしないでも統制せざるを得ない状態に立ち至つたのだ。

日本の公債は今百六十億位ある、年度末迄には豫算通り發行されると二百億になる。來年度は臨時費を入れると八十億になるといふから、その大部分を赤字公債によらねばならぬとすると、公債總額が三百億なんてことはさう遠いことでない。

公債に比例して物資が増加して行けば、所謂經濟の膨脹で決して悲觀するではないが、日本の今日はそれと正反對に物資を戦争によつて大消費をしまつたのだから大變である。手を放せば石炭がトントン百圓だとか、ガソリンが一ガロン十圓だとか云ふことになるに定つてゐる。

豫算をその物價に合せれば二百億あつても足りず、更らに豫算が増へれば物價が上るといふ風に、追ひ掛けつことをやつて遂に財政破綻となるのだ。歐洲大戰の時の獨逸の二の舞をやらねばならない。

x

x

自由主義の經濟といふものは戦争と兩立しないといふことが今日の原則である。自由主義の滅亡は即ち私利私慾の觀念の滅亡に外ならない。そこで宗教といふものも今日迄のやうにゴマ化しの議論をやつて居つてはいけないと思ふ。煩惱即菩提といふやうなことを曲解して私利私慾を公認するやうな觀念は一掃せねばなるまい。私利と云ひ私慾と云つても、所詮國家が亡びれば何もなくなつてしまふのだ。私利を追ふて金を山と積んでも、それは反古紙となつてしまふのだ。先づ國家を祈らねばならないといふ日蓮上人の教へは、今日そのまま無修正で國民の教典とすべきなのである。

精神總動員と云ひ、經濟動員と云ひ、今更新らしいやうに思へるが、數百年前に日蓮上人は立正安國論に簡結に明瞭に説破されてゐる。爲政者も國民も一齊に讀むべき時だ。

本佛實在の論證 (二)

佛子 河合 陟 明

如是 我成佛已來 甚大久遠 壽命無量阿僧祇劫 常住不滅 我本行菩薩道 所成壽命 今猶未盡 復倍上數
我智力如是 慧光照無量 壽命無數劫 久修業所得 南無妙法蓮華經

本佛釋尊の大覺の教に依つて明かにせられたる如く、佛教に於ては、宇宙の萬有諸法を、宗教的に大觀して十界の人格實在となすのである。

この十界の無限に多なる諸人格は、その本體及び本質に於て、縦に時間的には、その因を尋ぬるに、本無今有に非ず、その果を究むるに、已有還無に非ず、不生不滅にして、本有の實在者であり、

横に空間的には、萬有諸法たる 十界の身土色心を互具して一心法界に過ぎ、本具の普遍者であり、かくの如き本有にして本具なる實在普遍の本體を有し、十界の人格的内容なる本質を有する者の
その實在の様式は、差別・有限・相對的なる個體的實在であり、

その人格的統一としての實在の意義は、自覺的・自由意志的・

自律的なる獨立實在にして、自己意識を有し、他によつて動かさるゝ者もあるが、究極的には、自己自身が目的を設定して行意し、自己自身が行爲の原因となり、即ち行爲に於ける内面的無限創造性を有し、知的・論理的には無限の變化を通じて自己同一性を保ち、行爲的・倫理的には無限の外的原因ありとも遂に自己責任を荷ふところの人格としての實在であり、

更にその現象或は現實としての存在の状態は、人格的實在の本性に根據し由來する自覺的・自由意志的行爲、即ち業とその業を一貫する因果の理法によつて、即ち人格的自由と因果必然律との相乘律によつて、現存在を構成し、現實の果報を獲得し受用し、

かくて本體と現象・本質と現實・論理的と倫理的とを一括して、時間空間的に、無限なる他の而て多の個體的な人格實在と

相依相關の縁起關係を保持しつゝ、しかも自己自身の獨自の因縁果報として、三世無限なる因果系列の歴史的連續體系を、創造構成せる獨立存在であるのが、一個體の人格實在の現實的狀態である。凡て無始以來、相關的獨立の實在である。

その本體の本有本具にして、超時空的また超個體的、法界無限の内包量を有しつゝ、普遍平等にして一如絕對なるを不變眞如といひ、その現象の因果群立し、時空的また個體的森々羅々、特殊差別して縁起縁生するを、隨縁眞如といふ。皆これ吾人の、己心の内面的體性の理と、外面的事用の相との、深秘の關係に外ならない。總相・別相を大觀すれば

事體理德にして、己心即法界である。
十界の諸人格、即ち差別・有限・相對的なる一々の個體が、總て原理的に、その内面的根柢に於て、本有不改の本體たる常恒不變・一味平等・法界一相の眞如の基礎に於て立ち、その個々無限が相互に關聯互具するのみならず、そのまゝ眞如絕對を包攝し、無限の遍滿性を含蓄するといふ、微妙深密の關係より見るならば、

實在は、無限に多なる無始獨立存在の、多元的人格實在と、その無限を總べて一絕對なる、一元的眞如實在との、二面を有し、從つて又、多元論と一元論との統一といふことができ、而てかゝる一體の宇宙の多元的構成、多元的宇宙の一體的統一は、哲學的なる形而上的・本體的統一といふべきもの

であつて、かゝる實在論を、一體的多元論と名けることができるであらう。

此に對して、更にかゝる無限の人格と因果一貫の法則との總てを自己の大意志中に照蓋受用しつゝ、この法と一如合體して自由であり、その自由は、常に價值的行爲に自由なるのみならず、また反價值的行爲の自由なる、罪惡的衆生の自由性(實には、無明より發する反自由性)にも止まらず、今一步深く、反價值をも價値化する眞の自由、いはゆる性善・性惡、修善・修惡、ともに總てに自由なる絕對的意志の菩提上の自由、或は又はゆる状態としての自由(寂照・報身)、能力或は活動としての自由(隨應・應身)、受動理性にも能動理性にも自由なる、かくの如き大自由の内證より、その照鑒の慈眼に映する、法界無限の十界の人格に、能動的・救濟的に働きかけ(内證自在、外用神力)、以てこの一切を悉く同化して行くところの、受用不盡の力ある、本佛大人格の絕對的大化導を信受し、

如來於三界中爲大法王、以法教化一切衆生、如來爲諸法王、忍辱大力、智慧寶藏、以大慈悲、如法化世

こゝに宇宙本來の如是相たり實相たる、迷悟兩界、相即相成、一念三千、妙法蓮華の儼然たるまた渾かなる大事實を大觀するならば、かの無限なる多人格、無限に多なる獨立意志は、その獨立のまゝ、その信不信、知不知の如何に拘らず、

その無限の全體を超え 全體を包み、法界の全象 妙法蓮華を證得・活用せられぬる 一大絕對人格に統一せられてゐることを知ることが出来るであらう。

かゝる多元論的實在の一元的統一は、かの哲學的・本體的なるものではなくして、その形而上的・本體的統一を 更に價値的高次の人格に於て 全く積極的・具體的に現實化した人格化したる超越的實在の宗教的統一といふべく、即ち多元人格に對する本佛の能動的・救済的統一、一言にしていへば、宇宙の大人格的統一といふことができるであらう。

かくして宇宙に於ける萬有諸法 即ち十界の人格の無限なる多元的實在は、その基底の内面に於て、法界一相・法性平等なる眞如絕對の一體の根柢に於て成立し、その上部構造ともいふべき精神的内奥に於て 本佛絕對意志の大人格的統一の中に於て存在してゐるものである。法界はかくの如き 多元的無限なる實在人格の 電磁的力の場ともいひ得るであらう。而て總ての人格的個體が、その基底の内面に於て 超個體的・絕對の眞如に根柢し、これに含まるゝと共に 又これを含蓄するものであり、その眞如そのものゝ内容に於ては無限に深きものがあつて、法界的にはこれを法性といひ、人格的に即ち人格に本具せられては これを佛性と稱するのであるが、顯つて考へれば、かくの如き佛性と一體なる眞如法性が、その本性に於ては由來 本有覺性のものであり(理本覺)、その

的・眞如實在が、人格に於て自覺せられ 個體の内容となる、そこに本有覺性として眞如そのものの深き自覺的・向覺的・意志的なる閃きと力が感ぜられる。人格的意志の要求がその根柢に於ては 眞如そのものゝ深い意志的要求でもあるのである。而て その人格化して行くところに超時空の世界より時空の世界へ 自覺的體驗の事實として時間が生まれる自覺は時間的發展の過程をとる。上求菩提となり 行菩薩道となり、法性身より報應身への推移發展となる。

それゆゑ 本佛實在の論證に於ても、
一面には 本體論的 眞如法性の 無作本有の實在と、
他面には 自覺論的 佛陀人格の 無始本有の實在との、二面の實在性と、その究竟最高の統一とを明かにせなければならぬ。もし本有といふときは、何れも本有であるが、一は「無作」の本有であり、一は「無始」の本有である。前者は法身の理的實在に當り、後者は修成報應の事的・具體的・佛陀格の實在を表す。

佛敎の敎理發展史上に於て、眞如の理 萬法を出生し 迷悟兩界を生じ、またこの眞如法性の理海に歸するといふ、生起も歸趣も、共に眞如に統一する思想は、長く佛敎史を支配した思想的勢力であるが、かゝる思想は未だ十全なる真理でないのみならず、かゝる統一は猶ほ消極的統一に過ぎない。また佛陀の無始の實在は、到底こゝには論證することが

固有の力によつて、 自己を覆ふてその本性を發揮せざらしめてゐるところの無明の間を破り 煩惱の重障を拂し、眞如そのものゝ本性に隨つて 隨緣・順理・法性的展開をなすときそれが不覺より未覺に進み 未覺より自覺し意志化して、永遠なる真理の直觀として眞智の内容・人格的内容となり我々の個體の内人格化して體現せられるのである。法性の自發自展 自己開展 それが我々の人格的創造の事實となる。それが人格に閃きたり體驗したる體現せられざる間は、超越的とも考へられるのであるが、根本的には内在的であり、いはゆる己心本具のものである。凡そ宇宙間 一切の存在 悉く本有のものであり、而て本有にして本具ならざる 即ち己心に本具ならざる 即ち内在的ならざる何物もない。絕對本具 絕對内在である、十界五具・一念三千といはれる所以である。

吾人にとつて認識以前として 空は即ち不空なのであり、認識に於て始めて妙有となる。己心本具の内容として無限に深いものであるが、而も未だ尙ほ自己の外なるものとして超越的・神秘的に考へられる所のものを、どこまでも自己に内面化し内在化し 自覺的・意志的内容としてゆくことが、人生の意義であり 人格の要求であり 生命の進化向上である。あらゆる有限的・差別・相對を超え 未だ人格的創造・時間的限定に入り來らざる 人格以前の超時間的・超個體的・超感覺

できない。
之に反し、佛敎の眞の積極的統一敎義は、かゝる無作本有の眞如法性を 己心の本有・本具性に隨つて 無限に自己に創造し開發して 完全にこれを人格に證得し受用し體現したる、修顯得體・實修實證の人格的佛陀の、是の如き佛陀の無始以來實在することを説いて、本佛の概念を構成するところに始めて成立し、而てこれがまた佛敎の眞の哲理の頂點であつて、即ち哲學の完成した處に直ちに宗教が樹立せらるゝのである。

而て實相といふ語も、敎理上しだいに發展して 理的より事的に進み、遂に人格の實在 人格の事相を指して 實相といふに至り、遂に佛身及佛土の相々實相の實在といふ 人格的及び具象的美の實在を論ずるところに極まるのであるが、今しばらく天台學的に かの眞如論をまた實相論と呼ぶならば、

本佛の實在に就ては、
一面に 眞如實相の 先驗哲學的思想と、
他面に 修因得果の 經驗論的思想との二面より論ずべく 前者は 佛敎の原理論として哲學的なる 涅槃論を展開して、これに更に 實相論と緣起論との二面を開出して、不變常住の本體と 隨緣生滅の現象とを双照し、後者は 佛敎の建設的敎義として 人格的實在の 宗教的なる 佛陀論を展

開し、これに更に 有限的莊嚴身と絶對的法色身との二種を開出して、人格實在と その本體の普通法界性とを大觀し、かくてこれらの一切が その思想的發展の迫り着き得たるところとして、本佛實在の一事に歸結するに至つたのである。

一は 認識論的、實在論的であつて、菩提論を形成し、
 二は 實踐論的、因果論的であつて、成佛論 乃至 教化門を開出し、

前者は 後者を俟つて 人格的・價值内容を得て 本覺論を究極して 無始事本覺論に到達し、

後者は 前者を得て 形式的・實在認識を確立して 得道論を圓熟して 本因本果論を構成し、

佛智に約する本覺論と 佛徳に約する本果論とは 相俟つて 人格實在の本佛論を形成し、

かくて涅槃論に於ては その本體的作用に於ける 無明より明・法性へ、理より事へ、未人格より人格へ、不覺より自覺へ 更に始覺より本覺への論理的開展を論ずべく、

佛陀論に於ては その人格的實踐に於ける 行因より得果へ、衆生性より佛陀性へ、菩薩行より佛果菩提へ向上したる 倫理的發展を論ずべく、

一は 汎宇宙的實在の人格的體現の根據を示し、

二は その人格的實在の 道德的成立の理由を教へ、即ち前者は 法佛一如 人法一體 對絶不二 俱體俱用の哲學的

完全實在なることを示し、

後者は 實在と因果との兩面を全うしたる、即ち因果律を全うして完全實在を自己人格に獲得・顯現したる 倫理的規範實在なることを知らしめ、從つて又、

一は 宇宙的より人格的へ、自然性の自覺的理性化への推移に於て宇宙と人格との關係を示す、即ち超時空的・超個體的・超因果的にして、また包時空的・包無限個體的・包因果的實在たる 宇宙大生命の、一人格的個體に於ける創造的發展を示し、

二に於けるこの人格的個體の價值實現的・因果的發展とその完成に於て、その個體に於ける人格的經歷と現實を、或はその過去と現在を物語るのみならず、再び最初の立場に 高次的に還元し、これを包容して、即ち個體に即して再びまた超個體的、時間的起源を通して再びまた時間的無始の存在として超時間的、人格に即して再びまた宇宙的となり、こゝに宇宙大生命と個體的な人格との、相即微妙なる關係が 現實に成立するのである。

予は此に於て、これらの交互相關的思想を 或範圍に綜合して、相反及び對應的なる一群の思想系列を構成し、佛教の教理發展史上の諸問題を背景にしつゝ、以て聊か

本佛の人格實在を論明し、その絶對性を顯揚するに當つて、その或一面に於ける綱要を概略ながら述べて見れば、本佛の

覺者としての絶對性、即ち予のいはゆる絶對覺といふべきものを、まづ自己に於ける絶對と 他に對する絶對とに分ち、

(元來 絶對といふことは自他の相對を超絶するのであるが、今はしばらく之を承認してみやう。)

その對自的 即ち自覺的絶對に於てまた 始覺と本覺との二面を論じ、その兩者に於てまた各々二面を開出する。即ち

涅槃の五性 三身論

佛因論 (一) 法性無作 (本體の絶對性) 眞如論 (本體論) 始覺門 (二) 因果修成 (現實的絶對性) 成道論 (本因論) 報身有始

佛果論 (三) 覺證無始 (形式的絶對性) 菩提論 (本覺論) 本覺門 (四) 本有十界 (内容的絶對性) 佛徳論 (本果論) 應身常住

これ且く一人格の自覺的體系の發展過程に約するのである。始覺とは有始開覺の義であつて時間的起源を意味するものであるが、その本體は超時間的なる先驗的實在にして、即ち

(一)に於て、その覺體たる眞如法性 佛性 如來藏の涅槃の本體は 本有今無に非ず 本無今有に非ず、いはゆる

(イ)、造作を用ひて存する有作に非ざれば、無作無漏のものであつて 本有の實在性を有し、堅固不壞金剛の妙體たり

(ロ)、有爲轉變の境界に非ずして 無爲常住の境地であり

(ハ)、因縁を俟つて後に生ずる いはゆる因縁生に非ず、また中間生に非ざれば、無生無出であり、不生不滅であり、一切の假相を去つて、眞にこれ實相である。いはゆる

宇宙の法性は 本來至寂不動にして起滅動搖なく、如來の法身は 湛然たる妙常にして無常遷流を離る。

しかもかくの如き法爾自然の存在たる 涅槃の境地 眞如の實在を 人格に體現したる佛陀の實在、佛陀の果報は、

(二)に於て示すが如く、諸教通有の獨斷的・無因・偶然的なる

(イ)、本來法爾の非人格的・未修顯の素法身的なる いはゆる自然覺に非ずして 因縁生であり、即ち因果的修行たる菩薩行の造作造業を俟つて始めてこれを出生成就したる修因報得・行因感果のものであり、是佛教一貫の根本原則たれば法華經は開經の劈頭より如來の徳行を歎じて、非因非縁非爲作の本體と衆生善業因縁出とを並説し、本佛開顯の極説たる壽量品に至つても尙ほ、從因至果的と從果向因的との二様の意味に於て 信解されねばならぬのであるが、その前者の意味に於て(古來の難問たる)、

我本行菩薩道が説かれる所以であり、かくて 實在には因果の法を具し、また因果を離れては實在を顯現し得ず、また實在は現れず、心眞如は意志的因果の自覺による

その因は従つてまた必然的に法性の無作に應じて、かのいはゆる諸宗教共通の不合理的・脆弱教義たる

(ロ)、作因に非ずして、了因であり、即ち造作因いはゆる造物主的創造を以て原因となす如き非眞理に非ずして、たゞ絶對の開覺によつて、本有の實相とその存在の意義を覺了し照了するものであり、かくて佛陀の實在は、

無因自然に非ずして、因果所成であり、
不修現前に非ずして、久修所得であり、

いはゆる因は久遠の實修を極め、果は久遠の實證を極めて因行の萬善果上の萬徳を收めたる、功徳に依て常壽を莊嚴せる者、これを實修實證・常滿常顯と稱する。而てかく、

(ハ)本佛の功徳の廣大無邊なるに約しては久修所得といふも(ニ)衆生の成佛の速疾頓成なるに約しては不久當得といひ、不久詣道場といひ、須臾聞此即得究竟阿耨菩提といふ。

かくの如く佛陀の覺は、因圓果滿の有始開覺であるが、しかもその始覺の本質、内容そのものが、依然として有始に止まり、時間的起源をどこまでも有するものであるならば、かゝる菩提の覺は不完全であり、かゝる佛智は絶對たるを得ず自覺・覺他・覺行窮滿たる佛としての價值なく、いはゆる圓覺たる圓融普遍・圓滿具足の實なく、佛自ら未だ猶ほ自己自身の自覺を完了せず、いはゆる了因の了因たる所以を失ふのであるが、この始覺の本質内容そのものは、

(三)、に於て明かなる如く、即ち本覺にして、始覺即本覺を成じ、換言すれば、始覺のとき本覺を開覺するものにして、始覺の覺力が無窮に溯源して、無始を窮盡し、了因の了因たる實を發揮して、法界の無始を照破し、無始の實相を覺證了得する。

茲に本覺の意味は大發展をしたのである。此に於て、

(イ)、五百塵點の久遠を、始覺とし、

(ロ)、乃至所顯の無始を、本覺とするのである。

而て、この乃至所顯といふことには頗る深い意味があるのであり、いはゆる文底秘沈といふ奥義も懸つて此に存するのであるが、もしその本覺の意味が單に無始を覺るといふのみであつては、それによつて表さるゝ佛陀は、

(ハ)、無始の覺者ではあつても、即ち「無始を覺る者」ではあつても、

(ニ)、「無始よりの覺者」ではない、即ち無始以來覺者として實在の佛陀ではない、況んや、

(ホ)、「無始よりの濟度者」ではあり得ないのである。

覺者たると救濟者たるとは、佛陀の人格的内容、佛陀の佛陀性を決定する必須不可缺的、二大根本概念であり、二大本質であるが、今、本覺の概念に於て、始覺に即する本覺の無始溯源によつて本覺の意味の或一面に於ける普遍安當性を明かにし、以て實在の實在たるを認識し、即ちその佛陀、及び

法界の實在性を確認して、形式の絶對性を成じ、尠くとも佛陀の佛陀性たるの半面を確立し得たるも、未だ十全なる佛陀格に非ず、完全實在の佛陀に非ず、而て凡そ對象なき認識はなく、客觀的内容なき主觀的知識といふ如きものはないのであるが、今や進んでその本覺の具體的・積極的内容は如何、無始法界の實相は如何といふとき、

もしこの實相なるものが即ちかの無始本覺によつて現るゝ無始の實相なるものが、最初の一に論ぜしが如き、單にいはゆる有始報佛の開覺以前の、否、今や有始に即して無始なる報佛の、その有始開覺の以前に、法爾自然に存する、本地難思の境智、眞如の妙理と、その本具する破無明の力用と、たゞ理實の妙法・非人格の妙法に止まる如き、畢竟かくの如きは眞如法性の理境に歸するのみ、佛陀の事體・智願・悲應の妙法實相に非ず、極果の妙體淨用に非ず、其は依然としていはゆる

法性の理海は湛然たり、眞如の一理まづ無明を發してこゝに九界あり、無明の衆生、理に順じ、行を修して、乃ち菩薩を生じ、行滿じ、果を證して、即ち佛を得たり、

といふ無始無明界裡の法性眞如たるに止まり、たとひ天台哲學に一步を進めたるが如きも、また竟に、無明緣起たるに陥らねばならぬ。これ猶ほ畢竟して理國論を脱せず、たとひ無始覺論に於て事圓の一半を得たるも、その全體を得ず。事圓

即ち人格と菩提に於て、即ち人格の實在と事相とまた菩提の覺證と實體と、二門四面に互つて究竟圓滿・圓融周遍を盡さず、理融は事融を得ずんば實には理融たることすら能はず、水月幻影つひに戲論に歸す。即ち

九界は本有實在なるも、佛界は本無なり、有始なり、今有なり、第二次なり。

眞如法性は九界を含むのみにして、佛界を含みます。たゞ理として法身の中に未修證・未修顯の無作三身を含むのみ、九界の無明が眞如法性を覆ひ、佛界に證得せられて果徳を成せる道後の眞如、妙覺所證の實相の妙理に非ず、果海の法性に非ず、無明殼藏・煩惱藏・隨眠界裡の如來藏・法身藏・法界藏のみ

こゝに無始本覺の本覺たる實なく、

こゝに無始本佛の儼存を見るなく、

こゝに無始主師親三徳の大恩教主・大慈悲教主の救に接するなく

こゝに無始本尊、本有尊形の尊嚴を仰ぐなく、また本來尊重に對する根本尊崇を致すに由なく、

また佛自ら無始本果妙徳・妙證を體現するなく、安住するなく、本果の本果たる所以を成ぜず、根本的の果報に非ず、かくて法界の本源に於ては、何等の尊敬すべきものなく、法界無始の元初に於ては、たゞ迷者の集團のみとなり、而て

この無始の迷者は何に依りて救はれ得べき、たゞ徒らに盲者の手を頼ぬるも、何の得るところ無きに終るであらう。

(四)こゝに於てか、更に嚴密に、一佛成道の論理と因果を推し、法華經本門 壽量顯本 佛智の内證を受得して 諸法實相 世間相常住 隨緣眞如 緣起常住 の事理に契ひ、本覺本來の意義に隨つて その本有の内容を尋ね來たるときは、即ち是れ一佛成道・絶對開覺の有始に即して無始法界を照破する その佛眼智光に映照し來たるところのものは、これ正に歴然たる佛界 嚴然たる佛陀 その實相 その威容 本地常寂の風光にして、こゝに即ち、

一佛の開覺に即して 佛界無窮の系列を立し、
しかも是の如き いはゆる佛々相望するにこれ即ち無窮なる

無始實在の佛陀を 本師釋尊の事顯本に攝盡し了つたのである。これ即ち涅槃界の大覺知 秘密藏の眞秘密、即ち始覺即本覺の實體 その最高價值内容を成立せしむるものであり、而てかくの如く 佛界無始 本有實在の佛陀を中心としたる 總じて十界全體の無始本有常住を覺照するを以て、眞の實相となすのである。これを實に本因本果不二の本果妙徳 妙證 妙果報の佛陀の境界となすのである。

いはゆる實相中に佛界の實在なくんば實相に非ず、天台ないし他の諸經教・諸宗派等の論するところの實相は實相たるも實相たらす 世間相も常住でない、
他面に於て又たゞ始覺論に止まり
始成正覺の佛 本無今有の十界互具を説く のみであつては、未だ眞に實在たることはできぬ、また實在の實在たる所以を知ることできない、畢竟して戲論である。もしそれ、
本覺本有の十界互具・色心常住を説く に至つて始めて眞の實在を自覺し、證得するのであり、而てかくの如く、始覺そのものゝ意味を發展完成したる本覺なるものゝ意味に、まづ無始無明を斷破して 無始覺證するの力を論じ、この本覺即無始覺なる無始の覺證によつて、いはゆる不變眞如の無作理本覺の無始法性も 隨緣眞如の無始緣起の當相も 悉くを總該攝盡して、法界本有の無限の内包量たり 無始歴然の一貫の實相たる 本有の十界常住・一念三千・事理一如・事體理徳の全象を これを眞の自己とし 我として 己心に證得することを論じ、以て本覺の能力も内容も こゝに於て完全なるを得るに至り、こゝに新にしてまた眞なる事本覺といふ思想が成立したのである。これ佛教に於ける絶對知識であつて、これを實に本化別頭の教觀たる 本因本果の法門と稱するるのである。

而てこの事本覺の意義の 必須不可缺なる二面を呼ぶに、前者は本覺の窮盡的力用として 本覺の外延的無限發展性と

の意義を失ふ、當に價值的・具體的内容に於て失ふのみならず、その實相の論理に於ても未だ眞を得ず、理實もまた成ぜず、いはゆる理常は實常に非ず、奪つて言はゞこれ影迷常のみ、これ假相・有爲相・虛妄相・夢中の權果たるのみ。

されば本覺の内容たる無始法界の實相とは 十界の本有を指すのであるが、就中 佛界本有の人格實在を以て 絶對的實相となすものである。これ實相の絶對第一義であり、これ根本的・價值的實相であり、こゝに佛教史上始めて顯れたる 佛界緣起の光明を以て 無明緣起の闇夜を破り、
實相の太虚に 本有の佛日を仰ぐに至つたのである。

こゝに至つて始めてまた、法界の眞實相たり眞緣起たる 眞の一念三千が成立し論證せらるゝのである。其は中間より生じた 或は生ずるものでない、また作爲し構成せられたる假相でもない、これ全く無作實在 無始歴然たる本有の實相である。茲に法界に於ける大覺涅槃の根本實在が知らるゝのである。

これ即ち佛敎の教系たる實相論の頂點にして また緣起論の終極であり、更にまた涅槃論が究竟して 佛陀論に一致し これら諸系統の思想がその最高の意義を完成して しかも微妙深密に相即圓融するに至つたのである。

かの一面に於て、實相論を説じて以て、
諸法實相 世間相常住といふ深き哲理を説くも、もし佛界
いひ、
後者は本覺の本有的内容として 本覺の内包的根本充實性といふことができるであらう。

而てかくの如き絶對認識たる事本覺によつて顯され、事本覺の内容として覺照せらるゝ 法界の實相たる十界 就中 佛界の本有無始なる所以の論理は、まさしく事本覺の思想的發展に應ずるものであるが、而も其自身に獨立自足の妥當的眞理として 完全なる眞理體系を構成してゐるのである。

即ち 本覺の認識性と 佛界の實在性とは、何れも眞理として 眞理性は共通であるが、その眞理の質的内容を異にする。

然し乍らこの兩眞理が本覺の意義を構成するものとして、しかも前者によつて後者の實在が覺られ、その實在性が明かにせられるのであるから、今こゝには兩者を相關的に對比して述べるならば、眞如の本體を因果の原則に據つて顯發したる 一人格の内面的認識の普遍性と共に、かゝる法性因果覺證の 多人格の同格的實在の普遍性が成立つ。或は、
一佛の絶對的自覺の眞理と相關して、
多佛の同次(二)的實在の眞理が論證せられる。

一人格に於ける自覺の絶對性、即ち一人格に於ける自己認識或は實在認識の普遍妥當性、換言すれば、一人格の自己自身に於ける人格完成の眞理性 なるものが成立つたならば、

即ち 一個の完全なる人格なるものが成立したならば、同時に更に進んで、かくの如き自覺絕對 無始の自己認識 自己即法界的全實在の本有覺識 即ち自己自身の人格完成といふ事實そのもの、また多的成立 乃至 無限の成立なるものが承認せられねばならぬ。即ち一完全人格の成立・實在によつてかくの如き完全人格の多的無限の成立・實在が、また同じく普遍妥當の眞理として成立つに至るのである。再論すれば 一人格の自覺的認識の普遍性 その人格の實在の眞理が成立つたならば、これはその人格に於ける十全なる知識として、即ちその人格の有する完全知識として、眞理である。完全絕對なる一眞理である。自己に於ての、又宇宙に於ての眞理である。

而てかくの如く完全なる一眞理を、自己人格に實現したる一個の完全人格が 出現 或は成立したならば、かゝる眞理的人格 規範的人格の一個の出現・成立・實在によつて、同様に他の人格の多の出現・成立・實在が承認せられる。即ちまた同様にかくの如き普遍的認識を内包し 自己の根本實在を自覺せる完全人格の 多數が成立つ。これがまた完全・絕對なる一眞理である。

一言にして言へば

一を承認すれば 多を承認する、

一絕對によつて 多絕對が立つ、

自らの力のみでは成就せないのであつて、必ずこれに外的力が加つて 始めてそれを成就せしめるのである。即ち、一面に於て、事物それ自身に生育發展成長力を固有せなければならぬと同時に、他面に於て、外界即ち他者よりこの事物に作用して 其れをして生育發展成長せしめるところの力 即ち外觸的誘發力が必ずなければならぬのである。この兩面を事物發生の必須の條件とする。前者は即ち因にして素質的可能原理であり、後者は即ち縁にして實際的決定原理である。これが實に佛教に於て明らかにせられたる 實在發生 乃至 實在成立の原理であつて また即ち一大眞理の體系を形成してゐるのである。

例へば、稻の田に植ゑられて天地の恩恵を受くるが如く、また嬰兒の慈母に於けるが如く、學徒の師匠に於けるが如く、病者の醫師に於けるが如きものである。

今こゝに、佛教の最大目的たる成佛論について、一人格の開發成道の事實を考察するに當つてもまたかくの如く、一面に於ては汎神論の論理に従ひ、一切の人格に成佛の種因たる佛性を本具し 眞如内熏の力を内在する、いはゆる

一切衆生悉有佛性と、更に進んで、

十界皆成佛道との原理が確立せられねばならぬと同時に、他面に於て、かゝる眞如性の佛性一念三千の佛種如來藏たるこの衆生の本具内熏の佛性の重發力と相呼應して、その佛性

一佛存在の眞理によつて 多佛存在の眞理を成ずる。

法界は無窮にして無邊 無始にして無終 時空無限にして際涯無く、この絕對法界には無邊・無量・無數・無盡の人格が實在するが故に、かるが故に、この眞如一體・人格多元 いはゆる一念三千といはるゝ如く、一體多元の人格實在の宇宙に於ては、その認識に於て一普遍 その人格に於て多絕對を成じ、一佛成道の大事實によつて 他佛また多佛なる乃至無限なる佛陀成道の更に新たなる大光明的事實が展開する。

一は 他を また 多を 全を 一切を 無限を 認めしめる 成立せしめる。

十界皆成といはれる所以である。而もこれは未だ猶ほ汎十界的の理(想)に止まるが、今こゝには一佛界の事(實)について 一或多成の實在を論明するのである。

しかも 先づ菩薩行 而て佛果といふ因果の大道理は儼乎として萬古を一貫する、無始無終を支配する。

いかなる時に於ても佛教は終始一貫、

我本行菩薩道であるのである。

而てこゝに更に 凡そ一人格の開發成道するについて古今一貫の必然的大規律たる この因果の理法に關して、更に尙ほ論明せらるべき必須不可缺なる 佛教の一大根本原理がある、それは即ち 一因非生の論理である。

抑も佛教に於ては、總て事物の發生成長は、その事物それ

を開發し菩薩行を行じて無限に向せしめ 遂に成佛得道せしめらるゝところの 如來秘密神通自在の大力用が 必ずなければならぬのである。即ち眞如内熏の力たる衆生の正因佛性と、この佛性の親として既に業に佛性を完全に顯發して覺他の絕對的同化力を有せらるゝ師主佛陀の極果の淨用たる、妙智願の下種益了因と、即ち信力と佛力と、自力と他力と、内外二熏因縁感應し 各々その絕對的力用を喚發して 遂にその絕對的目的を達成するのである。佛性の無限なる信仰向上發展力と、佛陀の無限なる感應救済成就力とは成佛論に於ける必須不可缺の根本原理である。これを自他合力・合成と稱するのである。

汎神教の宗教的完成には、必ずその普通の眞理的基礎に立ちあふる超越的全能者たる一大人格の實在の絕對能力が 現實に働いて來なければならぬのである。この一大眞理より嚴密に考察するならば、こゝに於てもまた、一佛の成佛得道には必ずその先佛の實在とその感應無限の妙用 即ち覺他窮滿の大力用が儼存せなければならぬのであつて、この一佛成道の必然的規律たる 行因得果なる根本的因果に於ける、内外因縁 自他合成の原理を 無限大の久遠永劫に展開し窮源してそこに歴々たる無盡の先佛を覺認し、竟に眞實に無窮にして無始なる佛陀本有の實在を極むるに至るのである。こゝに本因本果の原理が成立つのである。

かくの如くして茲に屢述し來れるところは、一切の部面に互り論理的整齊の首尾一貫性を發揮し、剛直にして且つ圓融微妙の真理の王國を建設する。一大佛乘の佛乘たる所以にして即ち認識に於ても、實在に於ても、因果に於ても、齊しく普遍安當の真理を確立したるものであつて、まさに徹底的汎神論である。

諸佛本誓願 我所行佛道 普欲令衆生 亦同得此道

我本立誓願 欲令一切衆 如我等無異 佛種從緣起 是故說

一乘 但以一乘道 教化諸菩薩 當知是妙法 諸佛之秘要

而て 凡そ認識によつて始めて實在は明かにせらるゝと共に眞の實在なくんば 又ならずんば 認識は空虚に終るのであつて、實在の實在することによつて認識はその具體性・積極性・客觀的内容を充實するのであり、更にこの實在はその本體は本有不滅のものであるが、その現實は因果によつてのみその實在性を獲得し、その存在する所以の理由を明かにするのであるから、而て又更に認識は、この實在の實在構成の因果をも同じく明かに認識するのであつて、かくして、認識と實在 實在と因果は互に相關のものであるが、

しかも、認識より實在 實在より因果へと、しだいにその具體性・積極性・客觀性を増し、可能性より實現性へ、純理的より實踐的へと、知識の 従つてまた 真理の具體的内容を構成してゆくのであり、かくしてこゝに真理の全體 即ち實

在の全家が明かに認識せらるゝに至るのである。

本論説に於て、まづ、一、眞如法性の無作本有の實在の本體論より、二、その因果修成による人格的體現 即ち本體の現實化 價値的人格化を論じ、三、その有始開覺の覺體に始覺即本覺を明かにして 本覺の外延的發展として形式的絕對たる無始覺證を説き、四、更にその内容を要求するに至つて十界の本有 就中 佛界の無始本有なる根本的價値内容を開出し、こゝに本覺の本覺たる知識客觀性を確立し、更にいかなる理由・根據に據つて、その佛界の無始實在を明かにするかに就て、五、まづ一面には、一佛の實在するといふ事實より推理を展開して、眞如一體・人格多元いはゆる一念三千の教義の示す如く、一體多元的人格實在(論)といふべき この絕對法界の 無限の時空に互り この一佛と同格的なる實在者 即ち佛陀そのものゝ多的無限の成立及び實在を展開し、六、更に進んで、その實在の佛陀の實在性の、かゝる純理的根據に對し 更に倫理的なる 即ちその可能的原理を更に一層現實に決定的ならしむる實踐的根據として、一因非生の論理より 佛教修行門の根本原理即ち成佛の因果論に進み 正因佛性と 下種了因 内外二熏の因縁感應 佛力信力 自他合力の成佛といふ理を無限に推及して 遂に無始を極め、こゝに即ち本因本果の教理に達し、而てこの佛界無窮・一成多成論乃至 成佛論に於ける自他合成の原理等は、まづ最初に

論じ出したる 眞如法性を人格に體驗して開覺成佛するといふ場合に於ても固より實相たり必須不可缺の原理であつたのであり、かゝる循環論的特質を以て愈その真理の確實性を立證し

かくの如く、知識 認識 眞理が 層々切々に深度・密度を増大し 高次の多次元的となり、具體性を得て積極的となり、佛教に於ける諸種の眞理群を包攝して こゝに佛教的知識に於けるいはゆる哲學的知識客觀性の發展を明かにし、以て佛教的一大眞理體系 一大知識體系を組織構成して來たのである。

翻つてかくの如き佛教知識の眞理體系より照し見て、今當面の問題たる 本覺即ち絕對知識の内容としての佛界の實在なるものを再び考察し達観するに、上來屢述の眞理を收羅して、愈々一層明かに、

まさしく 一佛の開覺成道といふ福音的大家實に據つて、こゝに則ち多佛無限の實在系列といふまた儼然たる大家實を展開し、而てかゝる多的無限の佛陀の系列を 無限に溯源し無窮に窮盡して 竟に佛界の無始なる實在 即ち佛陀の本有の優存といふ大家實・大眞理を成立したのである。

而て本因本果の原理によつて開覺したる 本覺の覺が無始本有を窮め、そこに本有の佛界 無始の佛陀を知見・覺證し然り靈山淨土・常寂光土に無始以來の佛陀と面奉し相會し、

面々相接し光々相交り 無窮の心と心と相覺り相照し相語り合ひ、重々無盡 帝網摩尼珠の莊嚴境現前し、本有の調和無作の統一 微妙の圓融を成じ是の如く、一佛はこの無限・無始の佛陀と全く契合一如し一體と成り、こゝに一佛は無限を總へ無始を一貫して一完全體・唯一絕對を成するに至つたのである。是眞に法界一相なる佛界の實相・大我の實體たり大覺法王位に超登して 菩提の果索性・涅槃の秘密蔵に入り大莊嚴者・大自在者と成つたのである。此に於てか當に、無始の覺者 即ち無始を覺つた佛陀といふに止まらず、眞に

(イ)、無始よりの覺者にして、同時に必然相關的に

(ロ)、無始よりの救濟者たる

佛陀の實在を明證することを得たるのみならず、更にこれを(ハ)、我が現前の中心當位たる一佛に體現攝盡して、こゝに全佛教の諸種教系に於ける 幾多の根本原理を悉く充足したるところの一大教理體系を組織し、本覺最高の又その本來の意義を充實し、本果妙の佛徳の最大の價値を顯現し得て、

さればとて又、畢竟有始開覺の時間的起源を認むる不完全なる覺者に非ず、本體本因本覺本果何れにも根本的實在性あり無作の本體と 因果の修證とを全うして しかも

有始に即して無始に達し、そこに無始の覺者・救濟者と相會し相合し、この無始の佛界を我に納めたる

我即無始の覺者 無始よりの覺者
本有の覺者 本來覺者 然り而て

本有の教主 大恩徳主 本有の佛果 常樂我淨に安住せる
教主たり 感應主たり 涅槃の境界に於ける無始根本の大覺
者・大濟度者たり、こゝに全く本覺思想の飛躍的大發展と根
本的内容充實とを齎し、

本覺者 本救濟者 二面共に全き 本果妙徳の本有の佛たる
一大本佛の實在を大成し、しかもこれを

我等が現實界の大師父たる 今番人界出現の生身 伽耶成
道の歴史的實在の佛陀 大眾釋尊にまのあたり拜するを得る
に至つたのである。

夫れ無限法界の中に於ては 衆生無邊盡くる所あらず、佛
界無窮盡まる所あらず、

しかも佛教の根本的教旨に於て一々個々の人格を論ずれば
衆生は 無始有終
佛陀は 有始無終

の原則は萬古を貫く。而て第三に、本有の一多總統人格たる
本佛は無始無終 の大事實が 法界無上の光明として永劫
に輝く 是を實に法界本有の 大本尊と仰ぎ奉るのである。
前にも言へるが如く、佛陀概念の二大本質 或は佛陀の二大
人格的内容は、これを大覺と妙化 菩提と濟度 自覺と覺他
智願と悲應 覺證と救濟といふ兩面となすのであつて、この

二面より佛陀 及び法界を大觀せなければならぬのであるが
今や、

佛界無始の實在を立することによつて、この無始の佛陀は
無始十界 無始法界を 無始以來 覺證し救濟し、無始の
衆生に 無始劫來 無始の智願と悲應を施されつゝあるので
あり、かくの如き 無始の覺證 無始の救濟 無始の智願

無始の悲應は、悉く皆 絕對開覺の佛陀に覺證 體驗せられ
包容攝盡せられ 收攝統一せられ かくて無始無終 無邊無
際なる 時空無限の全法界を 一大人格に如同體現して 全
法界と全くその容體積を同じうしたる 自己即法界・法界

即自己なる絕對本佛の實在を確立し、しかも是を實に我が釋
尊に顯本したのである。こゝに於て一人格の絕對の覺りは、
自己無限の大過去を覺り、即ち無始以來の自己を覺り、即ち

無始以來の法界を覺り、即ち無始以來の佛界を覺り、即ち我
が覺りが無始の佛陀の覺りと無始の佛陀の救ひの働きとを覺
りて覺りに覺りが重なり、我自らは無始以來覺りわたる者救
ひわたる者には非るも、而も今我が覺りは無限無始の過去を
覺り、無始に溯つて、これを直觀し 直證し 直覺し 無始に

満ること即ち無始以來の法界がそこに現前し、否 時を超え
て無限の時を包攝し、直ちに無始以來の法界を今我に再現し
體驗し體現し無始以來の佛陀の覺りは我が覺りと成り無始以
來の佛陀の救ひは我が救ひと成りて無始以來の佛を我に統べ

盡し無始以來の佛は我と成り、我は法界無限の時空を超え又
包み、法界無限の人格を超え又包み、我は一己身の一人格に
して而も法界そのものと成る。本地の風光はたゞこれ神祕
信得せよ信受せよ寂光に到つて世尊と俱に證得せよ。

發迹顯本せざれば實の一念三千もあらはれず、二乗作佛も定
らず、水中の月を見るが如く、根なし草の波の上に浮べるに
似たり。本門に至つて始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶ
る、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ。爾前迷門の十界
の因果を打やぶつて、本門の十界の因果をときあらはず。此
れ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の佛界に具し佛界も
無始の九界に備て、眞の十界互具百界千如一念三千なるべ
し。

本因とは何ぞや本果とは何ぞや 抑も因果とは何ぞや、即ち
本因とは九界の中に無始の佛界を具せるを開發することにし
て、本果とは無始以來十界具足の全體を我に具せることをい
ふ。修證を離れし法爾自然果には非ずして（これは果ともい
へず）而も無始根本の佛果なり 本來の大果報なり、たゞ實
修實證の開覺により 本覺によつてのみこの大果報を獲得す
然るに迷門には佛界の實在無きが故に、九界に果徳を具へず
されば何を以てこれを顯し出すことを得んや、故に即ち迷門
には本因成立せず、本無今有なり、非實在なり、非眞理なり
いはゆる理常は實常に非ず、奪つて言はゞ影迹常なり。佛界

の實在を果のみに談じて、因に關せず、因を開發せず開顯せ
ずと謂ふは、大なる誤である。

眞實の斷惑は壽量の一品を聞きし時なり
迷門の圓教すら尙ほ佛因に非ず

爾前迷門には當分の得益尙ほ許さず
本門十四品も涌出壽量の二品を除いては皆始成を存せり。雙
林最後の大般涅槃經四十卷、其外の法華前後の諸大乘經に
一字一句もなく法身の無始無終は説けども 應身報身の顯本
は説かれず。

釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等
この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り與へた
まふ。四大聲聞の領解に云く、無上寶珠不求自得云々

我等が己心の聲聞界なり。我が如く等しくして異なることなけ
ん、我が昔の所願の如きは今は已でに満足しぬ、一切衆生を
化して皆佛道に入らしむと、妙覺の釋尊は我等が血肉なり
因果の功徳は骨髓にあらずや。寶塔品に云く、其れ能く此の
經法を護ること有らん者は、則ちこれ我及び多寶を供養し
乃至亦復諸の來りたまへる化佛の諸の世界を莊嚴し光飾した
まふ者を供養するなり等云々、釋迦多寶十方の諸佛は我が佛
界なり 其の跡を紹繼し其の功徳を受得す 須臾聞之即得究
竟阿耨多羅三藐三菩提とは是れなり 壽量品に云く、然我實
成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫等云々 我等が己心の釋

尊は五百塵點乃至所顯の三身にして無始の古佛なり。
法性自然・眞如無作は、佛體・佛覺の本體なりと雖も、法身常
住は諸經の常談、報應顯本は壽量の獨顯、

伽耶始成を破りたる五百塵點 三身相即無始の古佛 無始色
心常住の佛 無始無終の本佛 本地難思境智冥合の無作三身
と妙法 久遠實成妙覺極果の境界 本覺本有の本佛 本佛本
法本有冥合の本佛、今番實在の佛陀を溯つて直爾に無始實在
の佛陀に契會し、毎自作是念無始根本の大慈悲體をとつて直
ちに眼前の世尊に拜す 現實にも 教理にも 眼前にも 久
遠にも 報應史にも 歴史にも 血湧き涙溢るゝ人格實在を
説きまた拜して餘蘊なし 慈父としての世尊 大法王として
の尊容 師主としての佛陀 大如來としての實在 儼乎たり
温乎たり

然善男子 我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫

かくの如く我成佛してよりこのかた甚だ大いに久遠なり、壽
命無量阿僧祇劫にして常住不滅なり

我本菩薩の道を行じて成ぜし所の壽命 今猶ほ未だ盡きず
復上の數に倍せり。

我が智力是の如し 慧光照すこと無量にして 壽命無數劫
なり 久しく業を修して得る所なり。

本門を以て之を疑へば、教主釋尊は五百塵點已前の佛なり
因位又是の如し。其よりこのかた十方世界に分身し 一代聖

教を演説して 塵數の衆生を教化したまふ。
我等が己心の釋尊は五百塵點乃至所顯の三身にして無始の古
佛なり

一面より見れば、釋尊は 實修實證・行因得果の佛であ
る、塵點久遠の往昔に 眞實成道 成佛したまひし佛であ
る。故に、我本行菩薩道は 世尊金口の教詔そのまゝ大眞理
大事實である。聖經の金文 如實に眞を明かしたまふ。しか
も久遠悠遠無限の太古にしてそのほとりを知らず。而も同時
に、他面より拜すれば、釋尊は本有常住 無始實在の本佛に
まします。これまた實に大眞理 大事實である。

因果修成 修顯得體は 佛教の一大根本眞理である。

佛界無始 佛陀本有は また佛教の一大根本眞理である。

實成にして無始の釋尊 成道にして本有の如來 本有の本覺
の本果妙徳の本佛の釋尊 五百塵點乃至所顯の三身にして無
始の古佛なる しかも我等が己心の釋尊 觀心本尊極果の釋
尊 己心本有の本尊なる本佛釋尊 我が己心に拜する釋尊

これ壽量金文の あくまで教相を遊奉しつゝ、しかもその文
底秘沈の眞實義を信受したる 釋尊内證の大事實 大眞理で
ある。これ佛教信仰の最終歸結である。

故にかくして 我本行菩薩道は今や轉じて 本佛釋尊無始果
上の淨用也九界も無始の佛界に具し佛界も無始の九界に備る
無始佛界所具の無始九界なり。これまた兩々相並んで儼然

たる大眞理である。兩面一括して これを本因本果の妙談と
稱す 一實道と稱す 生佛一如 因如果如の一大佛乘となす
本覺の十界 本有の十界 十界事體の無始互具常住 しかも
そこに本因本果の大道あり 成佛の要 得道の要 開覺の要
懸つて此に在り矣

淳善の佛子信受せよ焉

我未來に於て 長壽にして衆生を度せんこと 今日の世尊
の諸釋の中の王として 道場にして師子吼し 法を説きた
まふに畏るゝ所無きが如く 我等も未來世に 一切に尊敬
せられて 道場に坐せん時 壽を説くこと亦是の如くなら
んと願せん

これが實に 本佛釋尊及び我等佛子の成佛の佛體たる本覺
の覺體 本果の妙證にして、こゝに至つて全く 本覺・本果
の概念を完成し、即ち本覺の哲理 本果の倫理 菩提論にも
濟度論にも佛智論にも佛徳論にも 總て佛教教系を綜合完成
して 進んで竟に 本佛實在の最終的思想信仰を大成するに
至り 更に同時に 法界の群生・全人類の前に 大覺成道の
絶對境を開示して 無上の梵音・永遠の光明に接せしむるに
至つたのである。

南無妙法蓮華經 昭和十三年 世尊成道會 (つゞく)



漢詩

成島龍北

元旦口號

鐘聲百八動青冥。旭日曠々照草亭。
奉佛之前春大吉。南無妙法蓮華經。

其二

建國二千六百年。皇色瓜瓞正綿々。
東亞確保獨存我。不解中華抗日顛。
聖戰惟知斷一字。正義嚮處恩威遍。
膺懲南北壺漿服。仰見春初旭日鮮。

賦清正部隊下岩田上等兵

彈丸雨注水渠前。將發齊翻妙法蓮。
剛膽無雙挺身渡。一軍傳令己能全。

福島病院の小兒科を永く擔任されつゝ、醫者といふ者は、病人を治療することを本職と思はないで、病人をこしらへない様に端すべきである。との御高見から、常に保健法を説いて居られる有難い池田先生の玉稿を戴いたことを、衷心から感謝申上げる次第である。(滿生)

保健の要點

池田龍一

醫學は日々進歩し、社會施設もこれに伴つて色々と工夫が加へられて居ります。然しながら、病人は一向に減りません。減る處か、二三の傳染病を除いては、却つて年々増加の傾向を示して居ります。この原因は、一體、何にあるのでありませうか。

世の中の病氣は、色々様々の形で現れて居ります。けれども大概の病氣は、その根源に遡つてよく見れば、皆一點に歸することが出来るのであります。即ち、大概の病氣は、皆、その人の體力の衰へて居る時に發病するのであります。換言

すれば、體力さへ充分であれば、殆ど病氣などしないで済む、といふことになるのであります。即ち、年々病人が殖えて行く此の原因は、今の人の體力が昔の人の體力よりも年々劣つて來て居る、といふことに歸着するのであります。昔無かつた様な病氣が新に追々と出來て來るのも、昔の人の體力では發病しなくて済んだ程度のものが今の人の體力では難作な發病する、といふ様なことが多いからであります。

それ故に、體力の悪くなつて來た原因をよく知つて、これを除きさへすれば、

病氣は此の世の中から自然に減つて行くのであります。然るにこの根本的事項が兎角等閑に附せられて、末節的事項の方ばかりが却つて力齧を入れられて居るのであります。診療機關を如何に充實したとて、それで病氣など減る道理がありません。この解り切つた道理が等閑に附せられて居るのであります。誠に遺憾の事と思ふのであります。然らば、此の體力低下の原因は何であるかといふことになりませう。これに對しては

その一として、日光と新鮮なる空氣とに觸れることが少くなつて來たことを舉

げなければなりません。即ち、室内生活や車中旅行が多くなつた爲に、日光に觸れることが少くなり、且つ、塵埃と細菌とによつて汚染せられた空気を吸ふことが多くなつて参りました。又、ガラス障子が多くなり、紙障子が少くなつて参りました。その爲に、室内に入る日光中の紫外線の量が非常に少くなつて来て居るのであります。紙障子の薄い新しいものなら、紫外線を四〇―四五%通過いたします。然し、ガラス障子では、透明なるものと雖も全々通過しないのであります。紫外線透過ガラスと名づけられる特殊ガラスの如きものでさへ、その透過率は僅に三五%前後であつて、然も、一ヶ年後には普通のガラスと同じく透過率は零となるのであります。日光が吾々の健康上重大なる役割を演じて居るその主體は、この紫外線なのであります。それ故、ガラス障子といふものは、紫外線の點よりすれば、面白くないものであります。昔に比すれば、空中の煤煙塵埃が多くなつ

て、さなきだに紫外線の通過が邪魔せられて居る時、このガラス障子によつて、一層高度の紫外線不足を来たして居るのであります。又、一方に於ては、婦人の化粧が多くなり且つ濃くなつて参りました。その爲に、女の人に於ては、更に、皮膚の紫外線透過度が甚だ邪魔せられるやうになつて来たのであります。従つて胎兒も亦一層この紫外線不足の影響を受けるやうになつて来たのであります。

この日光と新鮮なる空気との缺乏が、如何に健康上有害であるかは、我々が日常飽きる程その實例に接するのであります。即ち、戶外生活をして居る者と室内生活をして居る者との健康を比較して見れば、私が説明するまでも無からうと思ふのであります。殊に、發育旺盛期にある幼兒に於ては、その影響する處の如何に大なるかは、次の一二の事項によつて誰にでも了解出来るであらうと思ふのであります。即ち、大切に室内でばかり育てられて居る子供に頭丈なのがあります

でせうか。薄暗い農家の一室に放置せられて居る赤ん坊で健康なものが居りますでせうか。醫者よ薬よと騒いでも、原因たる日光不足を除かない限り、益々弱くなるばかりではありませんか。これに反して、朝から晩まで戶外で遊んで居る子供に多病なものが居りますでせうか。又小學校に通ふ以前は多病であつたが、學校に行く様になつて戶外に出る様になつたら殆ど病氣しなくなつた、といふ例を數へ切れない程見るではありませんか。

又、家の造りが不良で、南から日光が入らず、南北に風が抜けず、只東西にだけ抜けて居るといふ様ながあります。この様な家は、冬には日光が入らずして西風ばかりが吹き込んで寒く、夏には南北の通風なくして只朝日と夕日とが差し込むので暑さに耐へられぬのであります。この様な家には絶え間なく病人が出来るではありませんか。殊に戶外に出て働かない状態にある人や子供で此の様な家に起居してゐる者は、一層甚しい祟りを受

けて、醫者通ひばかりして居るではありませんか。この様な種類の家に住つて居る人に、改築乃至轉宅を勧めて、若しそれが實行せられた場合は、如何なる結果が起るでございませう。私の知る限りに於ては、例外なく、追々と病氣の根が絶えて来るではありませんか。昔から家相といふことが問題になる所以は此處にあるのであります。即ち、南から日を受け、南北に充分風が抜け、夏の朝日夕日を防ぎ、冬の風の吹き込みを防ぐ様な造りに出来て居る家は、健康なる家相といふことになるのであります。

その二として、偏食の人が多くなつた事を挙げなければなりません。即ち、昔は玄米を食べて居りましたが、今では漸次白米となり、然も、近年は精白の度が一層強くなりました。その爲に、多量の蛋白質や、殆ど全部に近い脂肪やビタミンや、大部分の各種の礦物質等重要なる栄養素は、糠として取り去られ、我々

りました。然も、副食物は昔ながらであつて、糠の成分を他の副食物の増補によつて補はんとして居るやうな人など極めて稀れなのであります。更に一方には、牛蒡や芋や人参や大根の皮を剥いで捨ててしまふ人が益々多くなつて、副食物は昔よりもむしろ簡單になつて来て居るのであります。そののみならず、衣服費娯樂費等を捻出せんが爲に、食費を節約するといふ傾を生じて来て居るのであります。農村を見ましても、十數年以前までは、夏の夕方など、私は、道を行きつゝよく川魚の焼かれる匂を嗅いだものであります。然るに、近年はこの匂を嗅ぐことの少くなつたのに氣附くのであります。即ち、水田に施す化学肥料の爲に小川の魚族が殆ど滅亡に近づいて居るばかりでなく、獲つた魚や鳥は、昔に比して、金に代へられることが多くなり、自分等の口に入ることが少くなつて行つて居るのであります。

更に一方には、一般素人の人々の間に

中途半端の栄養知識が積まつて行つた爲に、食物に對して見當違ひの撰擇をする人が澤山出来て来たのであります。即ち基礎知識が無くては充分の理解が出来やう筈のない記述や、只枝葉的のことだけの記事が、盛に新聞雑誌に或はパンフレットとして出る様になりました。それを基礎知識のない一般の素人の人々が讀んで、無自覺にも半可通を以て、色々と工夫を凝らすのであります。その結果は、むしろ何も知らない方が餘程よい、といふやうなことになるを得ないのであります。又、現にそなたで居るのであります。

更に、子供に於ては、愛されるの餘り間食を與へられることが多くなり、その爲に食欲を害して物を食べなくなる者が甚だ多くなつたのであります。偏食乃至單純食のよつて来た原因の大部分はこれ等の諸點にあると思はれるのであります。

凡そ如何なる上等といはれる食品でも

それ一種類を以て完全に栄養素を備へて居る物は、優良なる乳以外には無いのであります。これに反して、粗末といはれる食品でも、種類を多く集める時は、各種の栄養素が含まれる結果になつて、完全なる食物となるのであります。それ故に種類少く食する時は、所謂上等品を食しても栄養不良となるのであります。それのみならず、種類が少なければ或特定のものを必ず大食する様になります。その爲に、その特定のものを中に含まれて居る或種の栄養素は、必要以上に胃腸に入る結果となります。その結果は、不必要な分量が不消化となります。而して、不消化によつて生じたる有毒物が体内に吸収せられることになるのであります。即ち或種の栄養素は不足し、同時に又或種の栄養素は過剰による有毒物を作ることになるのであります。即ち、不足と有毒とが同時に生じることになるのであります。これに反して、種類を多く食べる時は少量宛で各種の栄養素が充分入る爲に、

自然の要求として大食の必要がなくなつて来るのであります。小食で間に合ふ爲に胃腸に無駄骨を折らすことが無く済むのであります。

そも／＼食物の好き嫌ひをする人で丈夫な人が有りますでせうか。殊に、成長の甚しい小兒で偏食する者に丈夫なのが居りますでせうか。これと反對に、悪食といはれる程に何んでもかまはず食して居る人で弱い人が有りますでせうか。又いくら食物の用心をしても健康が好くないので、焼けを起して何でもかまはず食した處、却つて健康になつた、といふ人を往々見受けるではありませんか。

それでありませうから、中途半端の理窟など云はないで、何んでもかまはずよく咀嚼して食べるといふ事が大切なのであります。牛蒡でも芋でも成るべく皮の儘でよく咀嚼して食べるのがよいのであります。皮の中には中味にない成分が含まれて居るのであります。卵なども黄味ばかり食はず、白味も共に食べなければ片手

落の食べ方となるのであります。然るに半可通の人々はこれ等の重要栄養素を皆捨て居るのであります。何といふ淺はかな事でありませうか。無自覚なる半可通といふ者位危険なものはないと思ふのであります。然し、運用を誤らないだけの充分なる栄養學的知識を習得するといふ事は、仲々容易なことではありませぬ。然も、栄養學を充分知つた者と雖も結局する處、實際問題としては、

何んでもかまはず出来るだけ種類多く複雑に、腹八分目に食べる。而して、成るべく加工を避けて、充分咀嚼して力まで食べる。

といふことに歸するのであつて、それ以上一步も出ないのであります。それ故、昔から食物と名づけられて居る物は、何一つ悪いものはない。何んでもよく咀嚼して食べれば差支ない。

と考へれば間違ひないのであります。然し、偏食を改める場合に、急激なる改め方をするのは却つて不結果に終ることが

あるのであります。即ち、今迄粥ばかり食べて居た者に俄に筍の根を食へさせたり、又は、ビタミンAが不足して居るからといつて胃の弱い子供に早速肝油を與へたりなどする様な方法は却つて有害であります。偏食ばかりでなく、他のことでも、改める時には徐々にしなければよい効果を擧げることが出来ないであります。この事をば保健上よく注意して頂き度いのであります。

その三として、睡眠不足をする人の多くなつた事を挙げなければなりません。即ち世の中が複雑になつて来た爲に、睡眠不足を来たす様な職業や機会が甚だ多くなつて参りました。睡眠不足位甚しい疲労を身體に及ぼすものはなく、従つてこれ位體力の減衰を來すものはない、といふ事は私が説明する迄もないであらうと思ひます。

その四として、過勞と運動不足とが人の間に多くなつて来たことを挙げなければなりません。世の中が複雑になつて

來た爲に、或は過勞となり或は運動不足となる様な事情が甚だ多くなつて來たのであります。昔から、「無理は病の基」とか、「養生とは身の程を知ることなり」といはれる程であります。これ等の「無理」とか「身の程」とかいふことは、常に肉體的事のことばかりを指してあるのではなく精神的のことをも指してあるのであります。即ち、仕方のないことを諦めもせずして、悶えたり心配したり、或は疲れを押して體力以上のことをやつて居れば、一時は差支ない様に見えても、必ず後日にその祟りが現れるものであります。これと反對に、精神を朗に持つて物事にくよく／＼せず、肉體にも體力以内の事をやつて居るやうな人で、多病な人がありますでせうか。又心身の運動不足といふことが如何に健康上有害であるかは心身を動かして居る人と然らざる人とを比較して見れば一目瞭然であらうと思ひます

即ち、始終立ち働いて居る人で多病な人がありますでせうか。始終仕事もせず

坐つてばかり居て、精神の緊張をも欠いで居るやうな人で、丈夫な人がありますでせうか、又、有福に暮して座つて居た間は弱かつたけれど、貧乏して働かなければならなくなつてからは追々丈夫になつた、といふ様な人をば甚だ數多く見受けるではありませぬか。それ故、心身の過勞と心身の運動不足といふ事をば、自分に對しても他人に對しても慎まなければならぬであらうと思ふのであります

然も、これ等のことは、その人々の能力體力の如何によつて一樣に行かぬ事柄であります。自分の能力體力を省みて、過勞にならぬ様に、且つ運動不足にならぬ様にしなければならぬのであります。既に申分のない幸運に恵まれて頭健なる發育を遂げて居る成人が激烈なる生活をしても左迄疲勞しないからとて、それを他の人が眞似るが如きは慎むべきであります。即ち、自分の身の程をよく知るといふ事が肝要なのであります。

(人々の體力の様でない事に關しては

後で述べます)

その他細かい事をいへば、まだ色々ありますけれど、大體以上の四項目で根本問題は盡きると信するのであります。即ち、

(一) 出来るだけ日光によく當つて、

(日光に當ることの出来ない人は附録の「紫外線に就ての常識」の項を参照)

(二) 何んでもかまはず色々なものを複雑によく咀嚼して食べて、常に多少の動物性食品を混ざること忘れな

い様に、

(三) 寝不足をしない様に、

(四) 心身の過勞にならず、又心身の運動不足にならぬ様に、

すれば、體位は漸次向上して、大抵の病氣には罹らないで済む様になるのであります。萬一罹つたとしても、大した病氣にはならないのであります。假令傳染病の如きものに罹つても軽くすんでしまふのであります。病氣の輕重はその人の體

力と精神力との如何によるのであります。重症になるのは體力精神力の弱い人なのであります。病氣そのものが重いのではないのであります。現在蔓延を極めて亡國病といはれて居る結核の如きも、罹病の誘因はこの四項目に背反するからであります。殊に、婦人の生活が第一項第二項に背反することの甚しい爲に、産れ出る子供の多數が既に虚弱體質といふ罹病の誘因を持つて産れるやうになつて來たからであります。それ故、若し國民全體が以上の四項目を實行することが出来たならば、遂からずして現在の病人の七割乃至八割は無くなるであらうと私は信するのであります。我々が實行し、我々の子が實行し、我々の孫が又實行いたしま

すならば、國民の體位は如何ばかり向上するか解らない程であらうと信するのであります。然も、この四項目は、如何なる程度の人に對しても理解せられ、且つ實行せんとする意志を向け易き具體的事項ばかりであると信するのであります。

以上申上げました事は、概の上の論ではないのであります。私が二十年間に亘つて觀察して來た事實から申す保健の眞髓であります。

最後に、今一言附け加へさせて頂きます。胎兒時代によい發育をして産れた赤ん坊は乳兒時代に殆ど病氣をしないのであります。乳兒時代によい成長をすれば乳兒期に入つて病氣などするものではありません。これに反して、胎兒時代に發育が不良であれば乳兒期に弱く、乳兒期に弱ければどうしても乳兒期に弱いののであります。乳兒期に弱ければ青年期に弱いののであります。故に、妊娠中に前述の四項目を實行するのと否とは、生れ出る子の一生の健康を左右する結果になるのであります。胎兒期の一ヶ月の發育遅延は乳兒期の數ヶ月の遅延に匹敵するのであります。乳兒期の一ヶ月の遅れは、乳兒期の數ヶ月以上の遅れに相當するのであります。それ故、優良體質の人を作ると否とは、妊娠初期からの状態如何にある

のであります。妊娠中ツワリが甚しければ、この四項目を實行しようとしても實行出来るものではありません。然しながら、健康のよい婦人には殆ど無いといつても好い位のものであります。それ故ツワリを軽く済ます爲には、平生から前述の四項目に留意すべきであらうと思ふのであります。然るに、妊娠婦に對して

といはれて居るのであります。こんな不合理なことがありますでせうか。私は農村婦人に對して心からお氣の氣に思ふのであります。何んとかして、女を今少し優遇しなければ、とてもよい國民は生れないことになつてしまふであらうと思ふのであります。

(附 記)

「あれは悪い」とか「これはいけない」とか云つて、色々食物の制限をする風習が未だに残つて居ります。妊娠や産婦は、自分以外に子供といふ發育の盛なる者を養つて居るのであります。それ故、平生よりも餘程多くの栄養素を要するわけでありませう。それにも係らず平生よりも制限せられて居るのであります。これではよい發育の胎兒が出来やう筈なく、又、産後よい母乳が出来やう筈がないのであります。そのみならず、一般農村婦人は一家に於て、朝は一番早く起き、夜は一番遅く寝て、然かも一番栄養不良の食物を食べ、それで、子供を産み乳を與へる

一般日本人殊に東北の農村の人々、就中婦人に於ては、動物性脂肪が極めて僅しか食べられて居ないのであります。又手類、大根類、白菜類は澤山食べられてゐても人蔘や南瓜や青菜類は其の割に食べられてゐないのであります。その爲にビタミンA不足の人が甚だ多いのであります。不足の程度が進んで欠乏状態になつて居る人も相當見受けられるのであります。ビタミンAとは如何なるものであるか、といふことは附録に記してあります。(次續)

人病を得るに十因縁あり

- 一には、久しく坐して臥せず
- 二には、食貸すことなし
- 三には、憂愁
- 四には、疲極
- 五には、淫佚
- 六には、瞋恚
- 七には、大便を忍ぶ
- 八には、小便を忍ぶ
- 九には、上風を制す
- 十には、下風を制す。

——醫 經——

記事

本部 團報

幹部會 十一月二十七日第四日曜日午前十時より正午迄於本部幹部會を開催し、上田理事長主宰の許に、布教上の要義並に新年會等の件に付協定した。

釋尊御成道會 十二月八日の未明、大聖釋尊、内外の魔を降して遂に大悟し給ふたといふ最も意義深い日を記念して、吾等は日曜日午後二時からその大慈大悲の感謝清集を開いた。

貯蓄報國強調週間 十二月十五日より一週間に亘り、經濟戰遂行の爲め、各自生活の刷新を期して形式的贈答を廢し、物資の節約を心懸け、勤儉貯蓄以て經濟戰の勇士たれと當局よりの申合せもあり、それには根本に國民の正しい宗教信念に覺め、精神的法悦に安住せしむべく、本部では此週二回の教化陣を張つて師子吼した。

御遺文講座 日蓮聖人といへば直ぐ立正安國論といつた鹽梅に、又世間では日蓮主義は國家至上主義だと思へる人が相當ある。而かも日蓮門下と自稱する人の中にも、國家を第一義と主張する者もある。兎も角立正安國論の内容を、その眞相を把まんとするものは、來つて小林一郎先生の講義を虚心坦

の八相の事實の中から一層深い意味を見る、即ち印度御出現の釋尊がとりもなほさず壽量品の本佛である、壽量の顯本といふ意義を辨ふべきである。八日の後夜に大悟徹底遊ばした大法悦を大衆に與へて、苦の海から濟度してやらうと説法教化が下されたのでした。等々。先生の法話後、岩井支部長の感想談あり、後茶菓を戴き乍ら座談會に移り、九時半散會した。

福島高商續仰會同窓會

十二月八日例會 當日は大恩教主釋迦牟尼世尊の御成道會に當り、本年最後の例會として意義深きものがあつた。從地涌出品讀誦唱題修行の後、磯部先生御指導の下に座談會に移つた。問題は近世資本主義を生めるプロテスタント教界の大立物カルビンの思想と、ローマン・カトリックの教學完成者トマス・アキナスの思想を中心として論議せられ、結局カルビンの思想は、努力主義・人格主義を其の長所とするも、個人主義に傾き、その價值論は平面的であり、超人觀・人身觀に至つては豫定説に墮せるもの。トマスの教説は、ヘブライ、ギリシヤ兩文明を融合・統一せる高遠なる思想なるも、その國家論は禪讓放伐を許すものであり、又その説く所人間の三大權利なるものは獨斷的にして、殊に極窮權の如きに至つては人倫道德の根本を破壊するもの。畢竟キリスト教は獨斷的

懷に傾聴すべきである。毎週火曜日晚本部講堂に開かれてゐる。娑婆は耳根得道と申して聞くことが一番！

日曜日清集 人生最高の目標、成佛。それは個人丈けではない、國家も成佛、世界も成佛、大宇宙も成佛！これへの行程は先づ三寶への淨信心教が最初であり最後である。開法や研究に偏してはならぬ。勤行の歡、同志一堂に聚つての修法の森嚴を味へ。毎日曜日午後二時より營まれてゐる。

福島支部報

十二月二日(金) 午後三時十分頃より高商生徒集會所にて本年最終の例會を開く。磯部先生には『法華經の實踐』と題して小乗、權大乘各宗の行法大要から進んで日蓮主義の實踐を述べ、我々佛徒は自分丈け正しい清いといふ超世間の高踏的態度は避けて、蓮華が汚泥に在つて染まぬ様に、宜しく大衆と和合しつゝこれを淨化善導して、お互に人格向上を計りたいものである。そこに四無量心と六度のお話から正しい信仰の必要を懇説された、後座談會に入り、午後五時過ぎ散會。

同日夜 大町中村邸で支部例會を開く。先生は『釋尊の成道』に就て法話をされた。お釋迦様の御生涯を拜するに、八相成道と申して、下天・託胎・出胎・出家・降魔・成道・轉法輪・入涅槃の八大別あり、その中でも主なるのが成道に在る。我々はこ

にして哲理の基礎を缺く、終には法華經によつて開顯統一せらるべしとの結論に達した。

法華經化城喻品の譬へは眞に靈妙なる哉。東方の聖者は日蓮は東より出で、西を照すと宣ひ、西方の豫言者は光は東方よりと叫んだ。アリアン民族の文明・キリスト教文明の時代は既に過ぎた。同窓會は微々たりとは云へ其の志す所は聖者の豫言に適はんとするにある。任務は雄大にして前兆既に明らかである。勇躍を禁じ得ない。

團費誌料維持費及寄附金領收

(自十一月二十一日至十二月十五日)

一金貳圓五拾錢也	千葉縣	成島日衛殿
一金貳圓也	東京	馬田平藏殿
一金貳圓五拾錢也	秋	林久子殿
一金參圓也	東京	安江清海殿
一金貳圓五拾錢也	同	上田晏弘殿
一金四圓也	横濱	國吉俊男殿
一金貳圓貳拾錢也	府下	岩崎清八殿
一金四圓也	岡山縣	金森義男殿
一金五圓也	東京	山田英二殿
一金五圓也	同	多田房太郎殿

横濱	箕輪嘉一 郎殿	一金五圓也	盛岡	中村謙藏殿
名古屋	原田日勇殿	一金壹圓貳拾錢也	大阪	澤田萬壽穂殿
千葉縣	小高了海殿	一金貳圓貳拾錢也	彦根	村田義夫殿
東京	野間平次郎殿	一金拾圓也	東京	夕田正信殿
同	秋本吉次殿	一金參拾圓也	同	横山正三殿
横濱	川島只亮殿	一金五拾圓也	同	原山正三殿
千葉縣	宮原やゑ殿	一金拾圓也	同	佐野中志殿
東京	寺澤萬三殿	一金拾圓也	同	
愛媛縣	廣田竹吉殿	一金拾圓也	同	
水戸	前刀實清殿	一金拾圓也	同	

右難有領收入帳仕候也 (以是代領收證)
財團法人統一團會計

現代鏡

淺草の顯本宗學會に、小林上人時代から一貫して強盛の信仰を持續されて居る原 みきさんは、宗學會の名物「原のお婆さん」として有名であるが、本會館の創建當時に、自分が永年少しづゝの小遣を貯蓄されたその殆んど全部を思ひ切りよく出して、本部御寶前の莊殿費中へ喜納され、アツト驚嘆せしめられたのであつた。

然るに今度又復金壹封也を差出されて、「これが彌々最後の御供養です、私は全財産を小松川會館や、郷里の方へ分配してしまひました、モ一これで一切清算済でやれ〜です」と如何にも嬉しさに、全くの無一物となつてニコ〜されて居る。何といふ徹底さんであらう。これこそ眞に解脱せる女人！ 立派な菩薩といふべきでせう。

省みて私共寔に慚愧に堪えない。原さん永年開法の功德は、其の不言實行の處に大きな活訓を與へられる。これを書く間にも無盡の感激が湧いてたまらない。靜かに御寶前に唱題致します。 南無妙法蓮華經……

豫告

本部に於て左記の通り新年國禱會、併せて事變陣歿諸員慰靈祭を嚴修仕り、終りて有志懇談會開催可仕候間時局柄奮つて御臨席賜り度候

左記

日時 一日七日(土) 午後二時 法要
會費 金壹圓也

進而準備の都合有之候に付御出席は四日迄に御一報相煩度候

財團 統一團
法人

猶例年の通り一月一日午前九時より正午迄元朝修法動行可仕、又自六日至二月四日三十日間、毎朝六時三十分より於本部寒行動修(白粥御供養)御誘合せ御參加爲法國切望仕候

辱知の皆様は夫れ夫れ歳末年始の御挨拶を致すべき筈であります、洵に乍勝手
本誌を以て代用させて頂きます。

平素兎角雑務に取紛れ御疎情勝と相成恐縮致して居ります、併し聊かでも正法の
御爲めに御奉仕させて頂いてゐることを無上の光榮と感謝致し、この氣分を若干
でも世の中にお告げしたいのですが、微力で意の如くなりません、どうか宜敷御
指導御清援の程幾重にもお願い申上ります。

爰に皇道繁榮、國運隆昌、皇軍武運長久、併せてあなた様の御信心御増進を慫慂
致します。

南無妙法蓮華經

礫部 満事 敬白

本多日生上人著書特價提供

聖 話 錄	改 版	特 價	金壹圓八拾錢
法華經要義	賜天覽	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	全	全	金壹圓九拾錢
日蓮主義精要	全	全	金拾五錢
眞理の基礎に對つて佛敎の信仰	全	全	金五拾錢
法華經要品	全	全	金參圓廿五錢
日生上人レコード(四冊)	全	全	金拾錢
日蓮 聖人	全	全	金貳拾錢
本尊意識に就て	全	全	金貳拾錢
釋尊の八相成道	全	全	金貳拾錢
法華經の心髓	全	全	金壹圓五拾錢
佛敎の心髓	全	特 價	金壹圓七拾錢
佛敎の心髓	全	送 料 共	金拾錢
佛敎の心髓	全	送 料 共	金壹圓
佛敎の心髓	全	送 料 共	金壹圓

東京市小石川區音羽町六十七番
財團 法團
統 一 團 出版部
振替東京九四二〇番

統一 定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共

注 意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
▲御購居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十三年十二月二十日印刷納本
昭和十四年一月一日發行
(第五百二十六號)

不許複製
東京市小石川區音羽町六十七番
編輯人 礫部 満事
發行人 礫部 満事
東京市四谷區内藤町一
印刷人 山田 英二
東京市小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
電話牛込六九六六番
東京市小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團 統 一 團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

